法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

<学部アーカイブ>法政大学キャリアデザイン学部オーラルヒストリー（１）：歴代学部長・初代事務主任・座談会

(出版者 / Publisher)
法政大学キャリアデザイン学部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政大学キャリアデザイン学部紀要 / Bulletin of the Faculty of Lifelong Learning and Career Studies
(巻 / Volume)
20
(開始ページ / Start Page)
135
(終了ページ / End Page)
186
(発行年 / Year)
2023-03

法政大学キャリアデザイン学部 オーラルヒストリー（1）

―歴代学部長・初代事務主任・座談会－

座談会出席者

〈参加者〉

法政大学名誉教授・キャリアデザイン学部元教授　笹川孝一
(キャリアデザイン学部設置準備委員長、初代学部長)

法政大学名誉教授・キャリアデザイン学部前教授　高野良一
（大学院キャリアデザイン学専攻設置準備委員長、第2代学部長）

キャリアデザイン学部教授　児美川孝一郎
（キャリアデザイン学部設置準備委員、第3代学部長）

学校法人法政大学常務理事　平山喜雄
（キャリアデザイン学部初代事務主任）

〈進行〉

キャリアデザイン学部教授　金山喜昭

キャリアデザイン学部教授　梅崎修

〈事務局〉

キャリアデザイン学部事務主任　齋藤寿宜

金山　先生方、本日はお集まりくださいましてありがとうございます。

本日は、キャリアデザイン学部設立準備から完成年度までについて、学部長経験者と、初代事務主任にお集りいただき、当時のことについていろいろとお話をお聞きしたいと思います。進行は梅崎さんと二人で務めます。梅崎

さんは法政大学150年史編纂を担当しています。今回の座談会は、学部紀要に掲載するほか、今後の学部25年史、法政大学150年史の資料として活用いたします。どうぞよろしくお願いいたします。

1.　キャリアデザイン学部の設立について

・学部設立期の準備状況について

金山　まずキャリアデザイン学部の設立についてお話しいただきます。当時、私は着任したばかりの頃で、設置準備委員会に出席していましたが、その頃の事情はよくわかりませんでした。まずは学部設立の経緯について、どのようにして本学部を立ち上げることになったのか、当時の学内状況なども含めてお聞きしたいと思います。

笹川　一番古いところは高野さんと僕が知っているのでそこをお話ししましょう。

キャリアデザイン学部の直接的な母体になった組織は、法政大学の文学部二部教育学科ですが、それに先立つ戦前戦中の歴史を見ておく必要があります。それは、法政大学における最初の教育学系教育・研究組織で、旧制中学校の教員養成をしてきた法政大学高等師範部です。そこには、その後に日本において、生涯にわたる人間の形成・育成にかかわる学問、今それを私たちは「キャリアデザイン学」という名のもとに作っていく努力をしてきたわけですが、別の言い方をすれば、社会教育学、生涯学習学、生涯発達心理学、教育計画論等の源流を築いた人々がいました。

笹川名誉教授

中心は、城戸幡太郎さんでした。東大文学部心理学科の助手時代にドイツに留学し、パウロ・ナトルプ研究から出発して、帰国後、法政大学文学部心理学科教授兼法政大学高等師範部教授・部長を務めました。心理学、社会的教育学、教育計画論などを専門としつつ、『岩波講座　教育科学』の編集責任者を務め、保育問題研究会（保問研）

と教育科学研究会（教科研）を創始し委員長となりました。1944 年に「教科研は人民戦線だ」という治安維持法違反容疑で、留岡清男さんと共に検挙され、法政大学を辞職することを強要され、事実上「解職」されました。戦後は「北海道の地場産業と北大教育学部の研究室をつなぐ」を標語に、北大教育学部の創設学部長になり、その後、東京の正則高校校長となり、「２００海里問題」など、日常生活と緊密な事象を取り上げた「問題解決学習」をリードしました。社会学部教授としてフランス美術史を講義していた城戸朋子さんは、幡太郎さんの娘さんです。

城戸さんの「右腕」が、教科研幹事長を務め、戦後は北大の社会教育主任教授になった留岡清男さんです。お父さんは北海道の遠軽で親と暮らせない子供や若者たちの施設「家庭学校」を開いていた留岡幸助さんです。

東大文学部心理学科での城戸さんの教え子で、文章心理学の大家とも言われ、戦後は、お茶の水女子大学長を務めたのが、波多野完治さんです。日本におけるピアジェやワロン研究の先駆けで、ユネスコフェローとしてポールラングランが「An Introduction to Lifelong Education」という歴史的報告をした 1966 年のプラハ会議に出席し、その後日本で『生涯教育新講』や『吾老ゆる　故に吾あり』『性こそ生なり』などを出版しました。日本における生涯学習心理学の草分けの波多野宜与夫さんは、完治さんの息子さんです。

旧制水戸高校生のときから『新興教育』運動に関わり、ジョン・デューイ『学校と社会』の訳者でもあり、戦後は文部省社会教育調査課長、雑誌『教育と社会』編集長をへて、東大社会教育研究室初代主任教授、日本社会教育学会初代会長などを務めたのが宮原誠一さんです。法政には、城戸さんが招いたと言われています。『青年期教育の創造』等を通じて、青年期、成人期における「教育」と「労働」、学校と社会の相互補完的な認識と人格の展開を探求し続けた人です。

このように、現在の日本における生涯学習研究の源流を成した、言い換えれば法政大学のキャリアデザイン学部が目指してきた、人間の生涯にわたる多面的なキャリア形成についての基本的な視野と議論を、この人たちは法政大学高等師範部時代と、治安維持法違反での検挙と法政大学「解職」、投獄を経て、戦後、他の大学において展開してきました。そこには、キャリア形

成における自己認識と他者認識、自己肯定、自己教育と相互教育・ピアサポート、高齢者教育・成人教育・青年期教育・少年・少女期の教育・幼児教育と保育を統一的にとらえる視野、産業現場と家庭や家族・地域社会や地場産業・企業社会や国際的な連携など、学校の役割の再検討・学校改革・教育課程・教育方法論、地域福祉と教育・学校・職場との連携、「教育科学」における実践研究と理論研究と循環、そのための研究集会論などが含まれていました。そしてそれらは、包括的に「社会的教育学」「Sozial Padagogie」「Science of Social Education」などと呼ばれていました。

少し長くなって恐縮ですが、続けます。キャリアデザイン学部を創るときに、法政大学におけるこの高等師範部時代の伝統を今日的に再生させようという意図がありました。そのことは、『法政大学報』2003年1月号で、当時の平林千牧学務担当常務理事（後に総長）や私が出席して行われた、キャリアデザイン学部創設直前の座談会で語られていることに、見られます。

この高等師範部は1948(昭和23)年に教育制度が変わって廃止になります。教員養成制度が、それまでの師範学校、高等師範学校で行われるという「閉鎖性」制度から、一般の大学においても行われるという現在の「開放性」制度に変わったからです。同時に、この時期に、法政大学文学部二部教育学科が発足します。なぜ二部つまり夜間なのかというと、現職教員の再教育というニーズがあったからだと言われています。戦前・戦中を通じて「軍国教師」として授業等を行ってきた教員たちが新しい理念・制度・内容にそくした教育を行うための再教育の場です。また、旧制度においては東大・京大を含めて旧制大学の学部卒業生は「代用教員」にしかなれなかったので、新制度の下で改めて教員資格を取り直すという人もいたとも言われています。また、この市ヶ谷キャンパスは東京のど真ん中にあって地の利がよい、そこで、高卒で霞が関の官庁街や千代田区や武蔵野市などの各区役所・市役所で働きながら夜間の教育学科に通って教員免許を取るという人もいた。少し後には、図書館司書・社会教育主事・博物館学芸員の資格を取る人もかなり出てきます。

この文学部教育学会には、法政大学文学部心理学科での城戸さんの愛弟子であり、城戸さんが委員長をしていた保問研の理論的指導者を務め、『私の中の私たち』という自己認識と他者認識についての名著を刊行した乾孝（いぬいたかし）さんが、

第１教養部教授を本籍としつつ、「兼担教授」としてかかわっていました。

学生の質という点でも、「二部」には意味がありました。ほぼ全員が職を持っている「社会人学生の学部」だったわけで、学生に勢い、生活体験から来る実感や問題意識が強くありました。だから、授業も活気があって教員も大変勉強になりました。私が法政に着任したのは、金山さんの前任者の段木一行さんと高野さんと同じ1988年でしたが、一時期、市ヶ谷の昼間と夜と、多摩の昼間と３コマの「社会教育演習」を担当しており、夏合宿などを３ゼミ合同でやったりしました。すると、そこでリーダーシップを取るのは市ヶ谷の夜の学生たちで、昼の学生の論理性や知識欲などと夜の学生の生活力、生活体験に基づく視点などが、うまくかみ合っていました。

しかし、1990年代半ばくらいから、いわゆる「1.5部生」が増えてきた。昼間フルタイムではなく、臨時のアルバイトで働いていて、夜の授業に出ている学生たちです。どうして二部に来たのか聞いてみると、「他の大学の１部に入って田舎で『どこの大学？』『聞いたことないねぇ』と言われるより、二部ということを言わなければ『法政大学かい、それはたいしたものだ』と言われるから、その方がいい」という答えもありました。そういうことが進んで、非常勤講師をお願いしていたNHKのディレクターの人から、「笹川さん、このごろの学生おとなし過ぎて反応もはっきりしないから、今年度限りにさせてください」と辞退されるようなことも出てきました。もちろん、地の利があるから定員割れは起こらないのですが。

そこで、古澤常雄さん、佐貫浩さん、児美川さんの前任の乾彰夫さん、高野さんと僕などが中心になって、「このままではまずいだろう」「どうしたものか」「第一部に改組転換できないか」「大学院を創ることはできないか？」と検討してみました。ところが、当時の文部省（2001年より文部科学省に改組）による大学の学生定員管理はとても厳しいもので、二部の学生定員を一部に転換させることはできない。また、第二部の上には大学院が作れないことがわかりました。そこで、文学部二部教育学科を前提に社会人を積極的に対象とする道を探ったり、「文学部改革」の一環としての出口も検討したりしました。しかし、それも文学部内の様々な力関係が錯綜して、必ずしもうまくいきませんでした。また、旧「第二教養部」を母体とする人間環境学部ができ

る際に合流する案もありました。後者の経緯については、1996 − 97 年に私はサバティカルで香港にいて詳しいことはわからないので、大学院の話ともども高野さんに話してもらうのがよいと思いますが、それも、結果的にはうまくいかなかったようです。97 年の 4 月に帰国してから「通信制大学院」構想の検討などを経て、99 年 12 月から、キャリアデザイン学部の設置に直接かかわる動きに至ったということです。

高野　僕がシカゴ留学から帰ってきてから、1997年頃に、文学部教授会内部で、笹川さんが言ったように二部教育学科をどうするかもポイントでしたので、同教授会主任であったこともあり、文学部改革の旗振り役の一人になりました。

その前史に位置付きますが、大学院で生涯学習研究科を創る構想も出しました。しかし、旧教育学科は心理学と教育学から構成され、生涯学習学という名称だと、心理学コースの存在感がさらに薄くなってしまい、学科内部や文学部内でも支持が得られませんでした。また、大学設置審議会の某審査委員の先生に面会して、設置に際する助言をもらうことまでしたのですが、笹川さんが言ったように文部省の定員管理もあり、この外在的な問題と先に触れた大学内部問題で構想は廃案となりました。なお、ある常務理事は、二部も「1.5 部化」の時代なのだから、教育学科を一部 (昼間）に転換すべきだろうともいっておられました。

そして、清成（忠男）総長体制になって、ABCD という形で新学部を創るプランが全学的に立ち上がり、そこのメンバーとなって学部改革をすることになりました。その改革プランには、教育学科は、第二部教養部（二教）の改組である人間環境学部の新設のなかに入ったらどうかというプランもありました。それに対して、二教の先生たちの自分たちでまとまりたいという意向や、教育学科の先生たちのなかにも移籍に消極的な方もいて、実現しませんでした。

高野名誉教授

さて、キャリアデザイン学部創設に先行して、ABCD プランの一環ですが、多摩キャンパスには

現代福祉学部が創設されました。旧教育学科の心理学コースのなかで、長山恵一さんなど臨床系の教員たちは現代福祉学部へ行き、認知系心理学の教員たちは、文学部心理学科の創設に吸収されました。

実は、もう一つの改革として、夜間・二部の特性を生かした、市ヶ谷キャンパスを横断するインスティチュートを創る案がありました。文学部日本文学科の勝又浩先生と私が責任者となって、法学部・文学部・経済学部（市ヶ谷で開講）・社会学部におかれた二部全体を改組するプロジェクトです。このインスティチュート改革は、通信教育部の改組や社会人対応も視野に入れていました。清成総長体制で教学担当の常務理事だった川上忠雄先生は熱心でしたが、二部改組については総長の清成先生の関心は薄く、大学執行部の中にも温度差があったと感じました。その後、インスティチュートは大学院レベルで設置されていきます。

二部改組はそういう形で終わって、『法政大学改革物語』（白石史郎著）には「二部に設置された教育学科が改組転換ベースになっている」と書かれていますけれども、キャリアデザイン学部の設置が本格化していくわけです。この経過は、笹川さんや児美川さんが詳しいでしょう。

笹川　それは、川喜多（喬）さん（経営学部）が話したことが基になって書かれている本のようで、いま高野さんが言ったことは正確だけど、先ほど言った高等師範部の伝統などは全く出てきませんね。

高野　川喜多喬さんを軸に、本学部の創設を語った本です。川喜多さんは途中で学部、そして法政大学を辞められたけれど、重要な役割を果たした方だと私は思っています。さて、同著ではそのあと、新学部構想としていきなり生涯教育学部が出てくると書かれています。

笹川　その本の叙述は、ちがいますね。それは児美川さんも知っていることだけど、もう少し経緯がありますね。

高野　そのあたりのリアルな経過は、笹川さんが話してください。

笹川　その本はかなり実際と違う、川喜多さんの眼から見たらこう見えたということが書かれているようです。これが一人歩きすると実際とは相当違う理解を生み出すので、この際、訂正しておいた方がよいですね。

高野　なお、話を戻すと、教育学部を新設すると、実習実験系だとされて、

社会科学系に比べてお金がかかることも絡んでいたかもしれません。

金山　ちょっと確認します。高野先生、最初にABCDという４つのプランがあったというお話でしたが、それぞれのプランの内容とはどのようなものですか？

高野　一教と二教の教養部改組でＡが国際文化、Ｂが人間環境。Ｃが小金井の情報科学、Ｄが多摩の現福（現代福祉）。僕が聞いた話では、教養部改組のプライオリティ（優先順位）が高くて、次のプライオリティが３キャンパスでの新設、つまり各キャンパスに一つはつくらないと全学合意が得にくいという理屈でした。

金山　教育学科の改革というのは、ＡからＤまでのどのプランになるんですか？

高野　現代福祉学部ではなかったよね？

平山　現代福祉学部じゃなかったですね。

笹川　社会学部にいた大山博さんが中心になって。

平山　そう大山先生。（現代福祉学部の）初代学部長。

児美川　この時期よりも前に，多摩に新設学部を創ろうとして結局はつぶれた案があったじゃないですか。発想としてはそれと似ていたんじゃなかったか。都市文化デザインみたいな感じ。記憶は曖昧だけど。

笹川　「現代文化学部」だったかな？文部省も、いったんは申請書類を受理して、僕はそこに着任する予定で法政に呼ばれたんです。それが、当時の第1教養部の柄谷行人さんたちと青木宗也総長の執行部との確執が激しくなって、柄谷さんたちが文部省に行って法政大学総長から出された申請書類は認められないと「殴り込み」をかけて、それで理事会は書類を取り下げて、総長以下常務理事は総辞職したと、古澤さんや乾さんたちから聞かされました。その結果、ぼくは文学部所属ということになった。

児美川　そんな感じで。それが途中から現代福祉学部になって。

笹川　そうそう。結局、多摩の問題はランニングコスト。キャンパスがものすごく広くて建物もいろいろあって、でも学生数が少なくて経営的に辛いから、学部を一つ新設して経営的に改善しようという意図があったんでしょう。

平山　多摩もそうですし、市ヶ谷の二部から一部に定員をもってくるのも同じ理由から。二部の学費は当時、一部の半額ですから。二部の定員数を一部にスライドすれば、そのまま倍額入ってくる。

金山　文学部のうち心理学科の話はさておき、その時、教育学科の人たちは、大学の改革プランに対して何かアクションを起こしたんですか？

笹川　いま平山さんが言ったことについては、なかなか複雑な結果になった。つまり、文学部の改革と二部の改革が重なり合いながら話が進んだのですが、結果的には、「二部」＝夜間という形式が、少なくとも旧教育学科については無くなった。それによって、昼間フルタイムで働いている人の学びの機会という機会均等も弱まった。それから、社会人と若い学生とが一緒に学ぶことによって教育・学問・研究の質が上がるという、リテラシーの質ということも、弱くなった。もちろん、ぼく自身もこだわりはありました。しかし、先ほど言った「1.5部」化の現実を前に、昼夜開講制への移行ということで決断せざるを得なかった。また、夜間定員を何らかの形で実質昼定員に移した方が学校法人法政大学としては収入増になるという経営上の理由については、改組転換に費用が掛かるということもあって、機会均等やリテラシーの質の問題が「犠牲になった」ことは否定できない。

金山さんから質問のあった、「何らかのアクション」ということですが、少し生臭い話ですが、今後語る機会があるかどうかわからないので、ここで、最小限のことを話します。

文学部改革の文脈では、1998年ごろ、僕が教育学科の学科長だったときに、文学部長も務めた哲学科のＢ先生から「こういうふうにするから」という案を示された。それは「教育学科」の内「心理コース」の臨床系は多摩に送る、認知系と「教育コース」は哲学科で引き受けるというものでした。それで、ぼくはみんなと相談したうえで、Ｂさんに案を了承することを伝えたのだけど、間に学部改革委員長というようなことでＡさんが入っていて、ＡさんのいうことはＢさんが示した案とは異なって、心理の認知系と教育コースの一部を哲学科が受け入れ、後の教育コースは「教職課程センター」のようなものを作ってそこで受け入れることにしたらどうだという案でした。これは、ぼくの憶測ですが、結局は旧教育学科の教育コースの人たちは組合活動など

にも熱心で、文学部の中にいるのは目障りだから、どこかに出してしまえという発想があったのだと思う。僕は、当時の学生部で、Ｂさんとは、中核派に対して一緒に体を張って戦ってた経験を持っていたからＢさんを信じてたんだけど、「見事に裏切られた」って思いました。

それで、文学部の範囲でやっていても仕方ないという雰囲気が生まれましたね。そこへ、当時、史学科にいた中野栄夫さんや日本文学科の堀江拓充さん、経済学部から出ていた学務担当常務理事の川上忠雄さんなどがいろいろと教育学科・教育コースの独立のためにサポートしてくれました。そこで、先ほどふれた「通信制大学院」構想の検討なども行われて、それが、学務担当常務理事が川上さんから平林さんに変わった1999年に幾人かの人が招集されました。

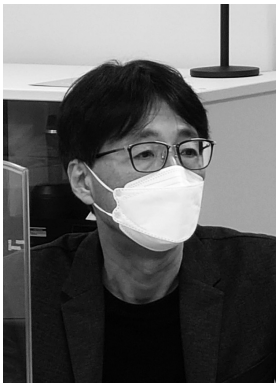
それが、今のキャリアデザイン学部に直結する最初の会議で、1999年12月のことです。産業集積論でイタリアのアパレル産業に詳しい社会学部の岡本義行さん、会計学が専門で経営学部の神谷健司さん、それに教育学科から私、その合計３人が招集されました。その席で平林さんに「教育から誰かもう一人連れてきてくれ」と言われて僕は、児美川さんの名を挙げました。それは、先ほど言った通信制大学院の会議のときに、たぶん、堀江さんと中野さん、川上さんが協議して、笹川、児美川を委員にしていたからでした。

この「平林勉強会」が、キャリアデザイン学部に直結する動きの最初でした。この勉強会で平林さんは、「生涯教育学部を創ることのフィージビリティー（feasibility）つまり実現可能性を検討することがこの集まりの仕事だ」という言い方をしていました。そして、私に座長をするようにと言ってきました。ですが、先に述べた城戸さんや波多野さん、宮原さんたちの考えを受け継いでいた私は、「学校教育」「社会教育」「家庭教育」という三分法では物事は解決しないと思っていたので、「生涯教育学部」というものが狭い意味での「教育」学部っぽくなることはよくないと思っていました。そこで、岡本さんに座長をお願いして私は副座長ということにしてもらいました。

金山　そのグループが母体になっているんですね。そのあたりのことについて児美川さん、いかがですか？

児美川　僕は96年に法政に着任したのですが、そうしたらとたんに教育学科

が危ないという話しか聞かなくて。「いったいどんなところに就職したんだ、俺？」って感じだったんですけど。最初は、ABCDの４つの新設学部プランのうち、人間環境学部と一緒になるという話も出てきたけれど、それは結局うまくいかず、その次には教員が配属できる教職課程センターを作るという話もありました。そこに移籍してくれと当時の川上理事から言われたのですが、全員がいっしょに移れるという案では必ずしもなくて、なかなか微妙なところがあったので、断ったわけです。その後はさらに文学部の一部の定員を入れて、一部・二部の昼夜開講的な生涯学習学科を作ろうという話も一時は盛り上がりました。けど、それもさきほどのような経緯でなくなった。結果、平林理事が招集した私的な４人の研究会から新しいプランがおりてきて、その後にこの学部につながったということですよね。


児美川教授

ここへ至る過程にはいくつかもオプションがあったので、そのどれかが実現していたらこの学部はなかったのです。でも、どれもが実現できなくてじりじりと押し出された結果、棚ぼたみたいな感じで新設のキャリアデザイン学部ができたわけです。

金山　その後、平林常務理事の私的な集まりからキャリアデザイン学部ができるまで、どのような経緯があったのですか？

笹川　2000年の３月に、平林常務理事が、「法政大学生涯教育学部を作ることには意味があり、それが作れそうだ」という結論を出しました。この勉強会はとくに答申のような文書を作成することはありませんでした。そして、数ヶ月後の2000年７月ごろに、「法政大学生涯教育学部の設置のあり方について」という諮問事項の「総長室プロジェクト」が立ち上がって、笹川座長、岡本副座長が理事会（総長）から指名されました。法政大学の全学部から委員が出て、事務局を入れると総勢30人近くでした。そして翌年３月に、「生涯教育学部を作るのが妥当である」という答申を出した。答申文書は私が退職するときに、金山さんに渡したような気がしますが、10－15ページく

らいの答申書だった気がします。

　それを受けて、2000年7月に「生涯教育学部（仮称）設置準備委員会」が発足し、私が設置準備委員長に指名されました。その時、岡本さんが政策創造大学院の設置準備委員長（その後研究科長）になるので、副委員長をできないということになりました。そこで、平林常務理事が川喜多さんをつれてきて川喜多さんが設置準備委員長代理として指名されました。ここから、川喜多さんが積極的に関与するようになりました。日本文学科の勝又さんも委員になって、笹川、川喜多、児美川、勝又、神谷、岡本が委員会のコアメンバーでした。

　理念、名称、定員等、いろんな議論をして答申を出しましたが、定員については、昼夜開講制にするということにして……

児美川　40プラス200で240、あとから設置後数年経って280に増やしました。

笹川　そのときにかなり知恵を絞りました。「昼間コース」「夜間コース」「昼夜どちらでもよい」コースを作ったんです。まだ文科省の定員管理がとてもきつかったので、昼間コースには40人の定員を全学的に絞り出して、これは理事会の仕事でした。

高野　平林さんが絞り出してくれっていうんで。

笹川　それで、先ほど高野さんが言ったように、法学部、文学部、経済学部、社会学部の夜定員をかなり引き受けました。つまり、人間環境学部が昼夜開講で引き受けた残りの二部定員をたぶん全部引き受けた。それで昼間定員が40人であと200人は夜定員。ただし、昼でも夜でもいいというコースを設定することによって、夜定員が昼定員に実質上変化した。いわば、「化けた」。

平山　昼間主と夜間主と定員上もわけて、募集定員もわけていた。入学したら授業は一緒なんですけれど、合格通知には、夜間主、昼間主、って出てたんですよね。

児美川　これは、昼夜どっちでもいいというコースがあるんじゃなくて、昼夜開講制という仕組みはそもそもどちらで開講されている授業を受けてもいいですよ。昼も夜も授業を自由にとれるという仕組みだったから、夜間主で入ったとしても昼の授業だけを受けても卒業できたということだった

んですね。

笹川　単位や卒業条件の点では全く区別しないという仕組み、いわば完全昼夜開講制だったわけですね。

平山　最初はその説明に苦労しましたよね。

梅崎　先ほど生涯教育学部という名前が出てきましたが、平林さんの招集で岡本さんがいるうちに出た言葉なんですよね？　ただ、文学部時代に生涯学習研究科を立ち上げようという動きの話もあったから混乱しちゃうんですけど。

笹川　その通りです。岡本座長の平林勉強会では、最初から「生涯教育学部」という言葉が大前提として使われていました。少し説明をします。

生涯教育、生涯学習というのは、まず、教育学科内部での議論として、ずっとありました。先ほど言ったように、ドイツのパウル・ナトルプやアメリカのジョン・デューイの議論の流れが、城戸さんたちの社会的教育学や西田幾太郎の京都学派の流れの中で、信濃自由教育･自由大学運動のリーダーでもあった土田杏村の「生涯にわたる自己決定的な学習」が大事だという言い方にもなってくる。これは､藤村や漱石なども含めて､いわゆる「大正デモクラシー」の底流でもあった。自分のことは自分で決める。そういう自己決定ができる人間を育てていくんだ。だけどその際に、互いに支え合う、育て合うということも大事だよね、という議論､「自己教育・相互教育」という議論です。この動きは、曲折はあるものの、大正から昭和にかけて、当時の文部省普通学務局第４課（社会教育課）の乗杉嘉壽課長や川本宇之介ら若手官僚たちにも広がって、障害者教育などもこの文脈でも広がった。こうした流れは、戦後、城戸、波多野、宮原、乾さんたちを通して、ユネスコ、学会だけでなくマスメディア、世論にも広がった。そして、評価は様々ですが、1970 年前後の波多野完治さんの奮闘もあり中曽根首相時代の臨時教育審議会(1984-87 年)が、第４次答申「個性尊重、生涯学習、変化への対応」(1987）で「生涯学習体系への移行」を打ち出したことによって、時代の趨勢になっていました。

一方、法政大学の理事会は、川上さん、清成さん、平林さん、堀江さんあたりで、そういう議論がされていたと推測されます。だから、梅崎さんの質問ですが、川上学務担当常務理事時代の通信制の生涯学習大学院構想でも、

次の学務担当常務理事の平林さんが笹川、岡本、神谷、児美川を招集した時も、はじめから「生涯教育学部」というコトバが使われていました。そしてそれは、総長室プロジェクトの諮問文にはっきりと示されていて、このときは、岡本さんが中心の１人としていて、川喜多さんはメンバーには入っていませんでした。

平山　（仮称）がついたんですけどね。

笹川　そうですね。総長室プロジェクトの答申でなぜ「生涯学習学部（Faculty of Lifelong　Learning ）」にしたかというと、教育と学習の厳密なコンセプトの話は傍に置いておいて、Learningは通常「学習」と訳されるけど「探求」という意味合いもある。そういう、自分自身が探求していく、「自分で行う」というイメージが前に出る方が、受験生の気持ちに届くのではないかという判断からです。リクルートの雑誌『キャンパス・マネジメント』的にいうと「商品名としての学部名称」という角度も必要だという発想です。法政大学という非常に大きい私立大学ですから。一定以上の受験生を確保することが、いわゆる基礎学力という意味での「学生の質」とも相関するので。

設置準備委員会では、いったんはそのように決まり、平林さん、星崎さんと３人でその都度行った「文科省相談」でも、OKが出たのですが、その会議の直後に新井入試センター長が僕の研究室に来て、「生涯学習学部では売れないから変えてほしい」と行ってきました。「『生涯学習学部』では、地方に行ったら老人のゲートボールくらいのイメージしかないので、コンセプトがよくても受験生を集められない」と。

文科省もOKしたことではあるけれど、入試センター長が言うのは無視できないので、清成さん、平林さんと相談して、諸手続きを踏んで、「学習社会学部（Faculty of Learning Society）」にしようということになりました。「笹川さん、学習社会学部というのはみんなが『おっ』というと思いますよ。『おっ』というのは『やられたな』『先を越されたな』ということです」ということで、清成総長も大いに乗り気で、文科省相談でも「いいですね」っていうことですんなり通った。ところが、今度は学部長会議で社会学部長から「『社会学部』と文字が重なるので断固反対である」と言われた。元学務課長の和田実一理事が「学習社会　半角スペース　学部なので区別できる」と説明したが、社

会学部長は取りつく島がない態度で、清成さんも平林さんもぼくも泣く泣くあきらめざるを得なかった。

それで、Human Development 学部というのを考えた。「教育」「学習」というのは人間形成、人間育成に不可欠な機能です。その機能の面から見た学部名称である「生涯教育」「生涯学習」「学習社会」という系列の名称が認められなかったので、目的論的な角度はどうだろうということで、Human Development を考えた。このとき、頭にあったのは、日本だけで通じるというのではなく、東アジアであれ、アジア太平洋、地球規模であれ、国際的なネットワーク、会議、学会等の場で説明するときに説明可能な名称がいい、ということでした。そうでないと、国際的な交流・協力の流れを作れないと思ったからです。だから、Lifelong Education, Lifelong Learning, Learning Society がダメなら、Human Development でどうかと思ったのです。それで、法学部や経営学部、文学部の教員や学生たちに意見を聞いたんです。すると、法学部の国際政治の人たちは「人間開発学部」はどうかという。経営学部の人たちは「人材開発学部」はどうかという。そしたら学生たちからは、「人間開発は人間が物みたいでしっくりこない」「人材開発はわかりやすいがわかりやす過ぎる。経営学部との違いが判らない」というような意見が出てきた。それで、智慧を出し合って「キャリアデザイン学部」、英語名称は「Faculty of Lifelong Learning and Career Studies」ということになった。

金山　これはどなたが命名したんですか？

笹川　最終的には清成総長の判断です。ですが、設置準備委員会での議論で決めた。その際、川喜多さんの貢献も大きかったことは、ここで明確に述べておきたいと思います。

いろんな案が諸事情でつぶれてそれで、困ったな、と思っていたら、川喜多さんが「笹川さん『キャリア』って言うのもあるよ。『キャリア』には、職業とか、出世とかいう意味もあるけど、元々は馬車の轍、そこから、人の歩いた軌跡、人生というのもあるから、そういうふうに広くとらえたらどう。笹川さんそういうの好きでしょ」という意見を出してくれた。「それいいね」と意見の一致を見た。それで、「キャリア形成学部」「キャリアデザイン学部」という２つの案を、笹川、川喜多、勝又、児美川、平林あたりで考えた。そ

して、「総長の意見を聞いてくる」と、平林さんが隣室の総長室に行ったら、5分足らずで帰ってきて、「この際、全部カタカナでもいいでしょう」ということで、「キャリアデザイン学部」に決まりました。

さてそれで、「『キャリアデザイン』は日本での造語だけど、それでもいいよね」ということにはなったけど、英語名称としては、そのまま「Faculty of Career Design」では通じないねということで、「Faculty of Lifelong Learning and Career Studies」でどうかと、川喜多さんが提案した。あえて、意訳すれば、「生涯学習による人生の育て方についての学問をするところ」ということになるでしょうか？だから、ぼくも他の人も賛成しました。「そうすれば、日本語名称としては潰れた生涯学習というコトバも復活するし」ということになった。このプロセスは、川喜多さんも大いに活躍して、みんなでワークショップをしたという感じで、学部づくりでも楽しい局面でしたね。

そういういきさつがあったものですから、「キャリア」には職業を含めるが狭くしないという約束事を初期のパンフレットに縷々書いた。職業、出世もあるが、人生という意味もあると、内包を示して、したがって外延としては、多様な職業のキャリアとともに、専業主婦のキャリア、患者や囚人のキャリア、地域活動のキャリアなど多面的なものにした。そういうことが、今の、「ライフキャリア」「ビジネスキャリア」「発達・教育キャリア」というコース名称に反映しているのだと思います。この分類でよいかどうかは検討の余地があるとしても。とにかく、「人生という視野の中で、自分というものと正面から向かい合って、自分の育て方、互いの育ちあい方とそこにおける教育・学習・探求・表現を生かし切っていくことを学び研究する学部」という共通のイメージがこの段階ではできたと、私は思いました。そして、キャリアデザイン学部が少なくとも受験生の確保ということで成功しているとすれば、この「キャリアの多義的な解釈」がその一つの理由と思います。

高野　キャリアデザインっていう言葉は、すでに和製英語として流布していたのかな？　例えば、金井壽宏のキャリアデザインに関する本（『働く人のためのキャリアデザイン』2002年）は割と早いのだけど、その前だよね？

笹川　前だね。だけど、ネットをひくと「キャリアデザイン研究所」という開店休業みたいな組織が早くからあったみたいでした。だけど、実質がな

いようだったから、実質的には法政のキャリアデザイン学部のインパクトは大きかったと思われます。

平山　伊勢丹がキャリアデザインスタイルみたいな事業をやっていたけれど、当時は（本来の意味でのキャリアデザインという語は）全然聞かなかった。キャリアデザイン学部と言うと、キャリアという言葉に反応する人はキャリア官僚のような方向性の学生を育成するのかと聞かれたし、逆にデザインという言葉に反応する人からは洋服を作る学部か、みたいなことを言われました。

笹川　入試センターに電話があって、「デッサンの試験はありますか？」って聞かれたと、当時の入試センターの人から聞きました。

高野　僕は実際に設置する際の入試担当で、川喜多さんとペアになってやりました。今言われたようにキャリアとデザインのどっちかをイメージして、我々の学部を志望するケースが多かった。「美術系ですか？」とか、「ビジネス系ですか？」とか聞かれもしました。だけど、児美川さんがいうように結局は何かよくわからないが、新しさに惹かれて受験生が志望したという面はあったはずです。

児美川　それはあったと思います。

高野　それもあってか、入学者にもけっこう意欲ある、おもしろい学生がいた。

金山　学生の話が出たので、次の話題に移りましょう。

2.　キャリアデザイン学部の完成年度に向けた４年間

金山　それでは次に、本学部の完成年度に向けた４年間ということで、学部の運営がスタートしてからの思い出話をお聞きしたいと思います。まず、スタートしてからいろいろ試行錯誤もあったでしょうが、いざ始まってからの様子について、いかがでしたか。当初の定員は何人でしたか？

児美川　240人。昼間主40、夜間主200で240でした。実際に学部をつくってみたら、受験生も集まるということがわかりましたので、大学から定員を増やさないかと打診があって280になり、さらに今は300人になっていますね。

金山　1年目はまだ今より学生は少なかったですよね。

笹川　僕はさっき児美川さん・高野さんがいったけど、渦中にあったから、なかなか評価できない。さっきも言ったけど、「キャリア」という用語を多義的に使ったのがよかったんだと思います。それは、多くの人が自分の個々の側面を大事にしていると共に、それらをふくんでトータルに自分と自分の人生を大事にしているという、商品経済社会が爛熟しつつある中での課題の受け皿にある程度は成れた、少なくともそういう期待を呼び起こしたからだと思います。またデザインもよかったと思います。お互いに助け合いながらも、結局は自分で作っていくんだという決意を促す、それができる社会を作っていくという方向性を示す、そういう役割を果たしてきたと思います。十分かどうかと言ったら、なかなか現実に追い付いて言っていないところもある。だけど、ここが最先端なんだという風になっているかどうかが、課題かな。

平山　よくわからないところも（笑）

笹川　そこはよくわからなくてもいいのかもしれない。渦中にあると評価が難しい（笑）。経営的に言ったら、最初の年の入試倍率が20何倍かな。でそのころは、お金の勘定もしていたので、最初の年の入試収入が1億3500万円でしたね。やはり新しい学部をやっていくには例えばこのキャリア情報ルームに資料がないとわかった時に、理事会にお金を出してもらうにも、稼ぎがないと何も言えないということもありましたね。キャリア情報ルームは、最初は場所を作ったけど迂闊にも資料費を全く計上していないことに気がついて、そういうことがあるたびに、学務担当常務理事の平林さんのところへ行って、こういうお金が必要なんだけどって言って、そのたびにほぼ満額だしてもらいましたが、それは受験倍率が高く、受験料収入も予想以上にあったからですね。平林さんは初期投資20億円で4年目から10億ずつ回収できればいいって言っていましたが、実際には3年目から年に10億円ずつ回収できたんですね。

こういうことをあまり言うのは不謹慎かとも思いますが、私立大学なので経営を抜きにはできません。その受験倍率の高さは、キャリアデザイン学部の複合性とか、キャリアを多義的に使い自分たちでデザインしていくんだと

いうのがある程度は学生に伝わってたように思います。そして、さっき高野さんが言ったけど、1期生とか2期生とかはそういう意欲ある学生がきていたんです。

平山　最初、指定校が調子悪かったんです。キャリアデザイン学部の先生方に指定校を回ってもらったんですけど、高校の先生は何をやる学部かわからないと生徒を推薦しづらいと。でも、自己推薦は想定の10倍くらいきたんですよ。

笹川　皆で手分けして、予備校や高校回りをしました。平山さんが言ったように予備校の職員や高校の先生は冷たい反応だったんですね。それで入試センターが模擬授業を多く組んでくれて、各校に教員が手分けして訪問し、高校生や予備校生たちに直接授業し、質疑応答すると、強い反応があったんですね。生徒たちが反応すると高校の先生や予備校の職員たちが反応してくれるようになった。

高野　入試担当として、２つのことを意識してやりました。１つは学部のコンセプトを伝えること。高校訪問では、首都圏の隣接地域を重点的にまわりました。例えば僕なんかは静岡へ、ある人は長野や新潟へ行った。従来のマーケットより広いマーケットで募集をかけなければダメだろうな、という思いからでした。それともう一つは、児美川さんがよく知っているだろうけど、一部の進路指導の先生方は、キャリアという言葉をもう知っておられたようですね？

児美川　ええ、ぎりぎりの時期ですが,「キャリア教育」という言葉が初めて登場したのが1999年の中教審答申でしたので，その後という順番にはなります。

高野　僕が静岡市立の高校へお邪魔した時、進路指導の先生に「キャリアですか、法政がそんなこともやるのですね」って言われたことを鮮烈に覚えています。先進的な先生の中に少数ですが、デザインですか美術ですかというのではない反応の方もいて、そこそこマーケットはあるなという手応えがありました。また、私が学部長になってからは「キャリアデザインは実験学部だ」って、いろいろなところで言いました。新しい試みをする学部にもマーケットはあるのではないかと感じました。梅崎さんも最初、高

校まわりには行ったのではないかな。

梅崎　そうですね、創業４年間はよく行っていたと思う。

児美川　公開のシンポジウムなども、けっこうやっていました。

金山　それは今でも続いていますね。

笹川　しっかり予算を確保したので。

平山　設立までに3回くらいやったんでしたっけ？

笹川　設立の前、4回やりましたね。スカイホールで3回、墨田のハローワークで1回。法政大学出版局刊行の『キャリアデザインと生涯学習』に、4回分とも収録されています。これについては、清成さんに、「清成忠男編で出してください」とお願いしたけど、「これは設置準備委員長で学部長予定者の笹川さんの編で出すものですよ」と言われました。

児美川　高野さんが言われたことですが、小･中･高のキャリア教育って、ちょうど2004年から中学校が職場体験をやるということで一斉に始まりました。我々の学部は2003年設立だから、小・中・高のキャリア教育が開始されたという流れが生まれていたことで助かったと思います。学校教育の中でキャリア教育が徐々に浸透していって、先生たちが知るようになった。ただ，それは僕らの手柄というよりは、たまたまの偶然というか，タイミングもあったかなと。

梅崎　偶然の一致みたいなことはかなりあったと思いますね。

金山　時流にのったんですね。

児美川　そうですね。

平山　（文科省の）ゆとり教育をやった寺脇研さんも講演しましたね。

笹川　寺脇さんにシンポジウム来てもらいましたね。第1回のときに。尾木直樹さんと、河合塾の寺下さんと。第2回は、桐村晋次さんに出ていただきました。既に、キャリアコンサルタント5万人計画が出ていたでしょうか。桐村さんは、その中心人物の1人でしたね。第4回は、茶道に造詣が深い国立民族学博物館の熊倉功夫さんと、松岡さんのところまで打ち合わせに行って、松岡正剛さんにも来てもらいました。最後は、文化の問題をやったんですね。金山さんが大阪まで熊倉さんを口説きに行って。松岡さんを推薦したのは小門さんでしたね。

金山　松岡さんのところには笹川さんと依頼に行きましたよね。

笹川　松岡さんの所に、金山、小門、笹川で打ち合わせ行ったときに、松岡さんが、卓球の試合みたいに、いろんな角度から球を打ってくるので驚きました。なかなか面白かったけど、緊張しましたね。ちょうど、「中核派」による学生会館の暴力支配や連続小火事件などもあって、外濠校舎を建てる計画が進んでいるときで、そこに、「茶室を作る」という話を平林さんや勝又さんとしていて、市ヶ谷のあるビルの茶室を平林さんと見に行ったりしたこともあったんです。それで、シンポジウムでぼくが「茶室くらい作りたいですね」と言ったら、田中優子さんが「『茶室ぐらい』というのはどういうことですか。」と、批判的にコメントされた。ぼくは、「能舞台とか茶室とかいうものは日本文化を考えるときに基本的なものだから、『茶室は必須』という意味です」と答えるなど、やや緊張したやり取りもあり、面白かったです。オフレコと思いますが、もう20年も経っているから。今、思えば、そうやって準備段階でもいろんな人たちにご協力いただいて、私たちも鍛えられましたね。言うまでもないことですが、職員や理事会の方々の支えも本当に大きかったことを実感しています。

梅崎　2000年以降が大変な不景気だったんで、仕事に対する将来不安が出てくる。だから、キャリアデザイン学部に関心が集まったというのはあるかもしれないですね。

笹川　厚労省サイドではかなりキャリアっていう言葉が出てきていたんじゃないですか。

梅崎　そうね。

児美川　厚労省によるキャリアコンサルタント養成５万人計画は、実はうちの学部よりも早くに打ちされていたことですよね。確か2002年でしたか。

笹川　ただしちょっと付け加えると、この児美川さんの近著にもあるように、文科省と経産省は水と油みたいなところがあった。今でもあるかもしれないけれど、そういう意味ではこのキャリアデザイン学部は、カリキュラムでも教員の構成でも、そこを繋ごうとしたと思います。「学校と社会」「学校と産業」「学校と地域」をつなぐ。これは、江戸時代後期以来、ずっと取り組まれてきた課題です。しかし、その場合の社会、産業、地域というのが、

地主小作制度が1947年まで残っていたこともあって、伝統社会、農林漁業、農山漁村地域に傾斜していて、都市部、先端産業・企業、グローカルな地域という点が弱かったのは事実です。この弱点を意識して、「産業と社会と文化と教育・人間形成と育成をグローカルな視野の下でつなぎ直す」、そういうカリキュラムや教員の構成にした点に、キャリアデザイン学部の特色があった、といえると思います。

4回のシンポジウムという文脈でいうと、発足後の最初のカリキュラム改革で「生活文化」が弱くなったのは残念だと思っています。生活文化というのは、生活様式、生活表現と言い換えてもよいと思いますが、これが、商品のコンテンツ、教育内容のコアに位置づくので、商品開発・カリキュラム創造、地域・地球設計などには不可欠だと思います。宮崎駿や高畑勲、久石譲などのジブリのアニメや音楽は世界的な人気ですが、ここには、日本も含めて世界の「文化」が圧縮されて位置づいている。例えば「ナウシカ」は『オデッセイア』に出てくる王女の名前。だから、生活文化への関心が弱くなると、「人材育成」とか「コンピテンシー」とか言っても、形式化されたものに傾きがちで、実質的な創造・昂揚・興奮を呼び起こすものになりにくいと思うのです。

ターナーの専門家の荒川さんはもちろん、金山さんは野田市や大鹿村その他の地域で取り組んできて、梅崎さんは島耕作論とか、神楽坂の地域文化論とかをやってきたわけですが、江戸期の狂歌の太田蜀山人の専門家の小林ふみ子さんは、「私の居場所はなくなったかな？」と言って、文学部に移籍してしまった。こういう生活文化論が学部に充満しないと創造的な学生を世の中に送り出すという風にはなりにくいかなと思います。梅崎さんに期待するところ大です。広い意味でのリベラルアーツも含めてアートの問題、教育基本法が言う「人格の完成をめざして」という点も、アート、美意識を育てることが欠かせないですからね。ぜひ、アート、芸術、生活文化・生活表現、美意識の醸成を、再強化してほしいと願っています。

・日本キャリアデザイン学会の立ち上げ

金山　キャリアデザイン学会が立ち上げられたのは、学部設立とほぼ同じ頃

でしたか？

笹川　そうですね。2003年の秋ごろから設立準備が本格化したように記憶します。学部立ち上げと、大学院、学会、研究所は、4点セットで準備段階から考えられていました。大学院とキャリアデザイン学会は、主に清成総長と話していましたが、平林さんは、「笹川さん、この学部は修士課程を含めて6年制で考えた方がいいね」とも言っていました。研究所は、小門さんが間に入って、あるベンチャー企業創業者の人から「年間1000万円」くらいのお金が入るという話があって、ぼくがその会社の社長室に4-5回通って社長と話を詰めたうえで、法政の九段校舎に来てもらって、その時の平林総長との会談をセットして、次回は調印というところまで行ったのですが、理事会内でいろいろな意見が出て、法政サイドが断ってしまった、そんな経緯もありました。それで、キャリアデザイン学会、キャリアデザイン研究所、大学院の３つのうち、キャリアデザイン学会と大学院はできたけど、研究所はできなかった。

金山　キャリアデザイン学会の設立は、どのような経緯で行われたのですか？

笹川　学会は、川喜多さんが軸になってやっていて、NECとかトヨタとかそういう民間企業の人事関係者に集まってもらって立ち上げたということですね。

児美川　2004年に設立ですね。

金山　わりとすぐですね。最初は清成総長が会長に就任した。

笹川　そう。それで、野田市でも根本崇市長に理事になってもらい中間大会をやりました。尾木さんも理事になって、「退職者の『セカンドキャリア』と地域活動」というような報告もしてもらいましたね。

梅崎　設立直前直後、多摩キャンパスで学部の合宿をして教授会をやっていたじゃないですか。その時の会議でも学会を立ち上げる議論もしていました。

笹川　そうですね。100周年記念館で、合宿しましたね。学部＋３点セットが最初からのプランだったんですね。

梅崎　普通、大学院は4年生が卒業するタイミングの、4年後でもいいわけじゃないですか。

笹川　そうですね。そこには、文科省との関係ということもありました。「生涯学習学部でOK」が出たのに名称を変えました。「学習社会学部でOK」出たのに、再び変えました。それで、文科省サイドも、「えー、『キャリアデザイン学部』？これで学部になりますか？学問分野として確立していますか？」と質問してきました。最終的にはOKになりましたが、こちらからいくつか条件を提示しました。1つは、「キャリアデザイン学会」を作ります。もう1つは「キャリアデザイン学叢書」を授業テキストとして順次刊行します。そして、「キャリアデザイン学専攻の大学院」を作りますとか、そういうことも付記して書類が受理されたとのです。大学院の立ち上げが早かったということには、こういう事情もありました。

平山　学位として認知されなかったですよね。当初は学士「キャリアデザイン」で「学」がついてなかった。今はついているみたい。

笹川　そっか。今はついている。学士「キャリアデザイン学」。

設置準備委員会の側に勢いがあり、やりたいという意欲があったのは前提ですが、そうせざるを得なかった事情もあった。文科省とのいきさつから。「キャリアデザイン学という学問はあるんです。それを明確にするために、学会、叢書、大学院、(研究所)」を進めますと、言わざるを得なかった。そこを、清成総長も平林常務理事も十分理解していた。付け加えると、学部がスタートしてからですが、平林さんが、「笹川さん、キャリアセンターを立ち上げたい。キャリアデザイン学部があるのに、『就職部』のままでは具合が悪いから」と言ってきて、その動きも始まりました。

梅崎　学会はいいけど、大学院は完成年度を待たなかったっていうのは、根本的な理由はなんだったんですか？

児美川　それは、川喜多さんはさかんに完成年度なんて待ってられない、すぐに作るみたいなことを言っていました。よく覚えてますけど。それはなんでかというと。

笹川　当時、平林常務理事とはほぼ毎日、多い日には3回も面談・相談していたけど、清成総長とも、10日に一度くらいの頻度で会っていろいろと協議をしていた。そして総長が、「笹川さん、急ぎましょう。設置の仕組みが変わったので、「届出」で経営学研究科内に作れば審査はいらないからこれでいき

ましょう」とうことで動き出した。だから最終的には総長判断ですね。

・大学院の立ち上げ

金山　それでは大学院のコンセプトや、設立にあたっての事情をお聞かせください。大学院の設置準備委員長は高野先生でしたか？

笹川　最初、清成・平林ラインでは、「川喜多設置準備委員長で行きたい」という話だったけど、川喜多さんが断ったのですね。その事情は、今は割愛しておきますが。そして、川喜多さんが高野さんを推薦し、高野設置準備委員長ということになりました。

高野　僕は、次の総長になる平林常務理事の本学部への思い入れが強かったことを思い出します。だから完成年度を待たずに…

児美川　新学部設立から2年経って、３年目にできた。

高野　平林先生がおっしゃるには、やっぱり軸はビジネスにあるから、独立した研究科をつくるよりも経営学研究科に入れた方がいいのではないか、と。笹川さんが言った、独立では比較的簡易な届出制度では済まず、コストもかかるという事情もあったけれども。他方で、経営学部には類似した人材組織マネジメントのようなコースがあり、そこからの差異化も必要でした。そういうことから、今につながる三分野（教育、ビジネス、ライフ）のバランスをとることを意識してつくったわけです。

　キャリアデザイン学研究科が経営学研究科から独立する時にも、その設置準備委員長の佐藤厚さんが、当初の大学院専攻の設置趣意書を踏まえてプランづくりをされた訳です。余談ですが、川喜多さんが僕の書いた趣意書を一字一句チェックしました。彼の添削を見て、社会学と教育学で用語の使い方が違うというのがおもしろかったです。複数のディシプリンからなる教員が学際的に集う学部の良さでしょう。それはそうと、最初の受験生は多かったよね、確か。

笹川　最初の3分野は、「ビジネス、生活文化、教育」でしたね。

梅崎　初年度は人気があって、確か定員オーバーで合格者を出した。

高野　募集も念のため3回やりましたが、受験者の多さは結局、ニーズが社会

の中にあったっていうことでしょう。経営学研究科の人材組織マネジメントもあったけれど、キャリアデザインのほうに来ようという社会人が多かったということが、企業環境を含めた社会状況としてあったということです。もう一つ、企業関係だけじゃなくて、大学を含めた教職員、あるいは大学でキャリアカウンセリング等を担当する人たちが応募され、そういうニーズに応えたと僕は思っています。梅崎さんは、どうして今、こんな準備をしているのか、と思っていたのではないですか？

梅崎　2年目で、学部が完成していないのに、大学院と学会が設立を準備しているってほんと可笑しいでしょ（笑）。すごく時間が圧縮されてる。

児美川　まだ完成年度を迎えていなかったから学生が少なかったじゃないですか。１年生と２年生しかいなかったわけで。

梅崎　まだ２年間は動けて。そして､3年になったときに､ゼミ生が入ってきた。感覚的には１年に何回合宿しているんだっていう感じだった。1回目が教員合宿でしょ、１年生合宿、ゼミ合宿して、大学院で全員で逗子に連れて行って合宿でした。

高野　八幡先生がセッティングした1泊2日の大学院生合宿ですね。

梅崎　生産性本部の施設でした。逗子の国際村のところだったと思います。

高野　僕の大学院創設への思いは、学部新設で雑多なニーズやプログラムをカオスみたいに取り込んだものを再整理する機会にしようということでした。大学院だからというのもあるでしょうが、お互いの授業科目の守備範囲を知るために、自分の科目に関する書籍リストを作って交流することもやりました。教えるための知識の集合体を考えると、重なるところも異なるところもあるわけで、そんな本質的なところでのコミュニケーションや相互理解が不可欠だろうと考えて、大学院を一つの梃子に利用した訳です。

私が学部長の時に､学部の２つ目のカリキュラムマップができたのですが、マクロ、メゾ、ミクロというカリキュラム構成もとりいれました。その学部のカリキュラムを作る時は、児美川さんにリーダーをやってもらって、改訂作業を１年くらいやりましたね？

児美川　それくらいやりましたよね。

高野　そういう経緯があって。大学院を作るということの大変さと、同時に

メリットや意義もあったということを言いたいわけです。

金山　大学院でキャリアデザイン学専攻が途中で独立するわけですよね。それはどういういきさつがあったのですか？

笹川　さっきも言ったけど、清成・平林ラインでは、「設置申請」は書類等も大変なので、「届出」でまず実績を積んで「一定のところで独立する」という方針が決まっていた。だけど実際に何年後に独立するかは決めていなかった。プログラム上、予定されていたことが実行されただけ。あのタイミングはどう決めたのかな？

高野　経営学研究科の中でいうと、お荷物みたいな意識もあるわけですよ。研究科の教授会には専任教員全員が出席しましたが、経営学研究科全体で集まると我々は異端というか、早く独立するなら出て行って欲しいという空気があったし、我が学部の大学院担当の教員たちには独立した研究科としてやりたいという思いも強かったのではないですか。佐藤厚さんに独立準備を任せたのは、いつでしたっけ？

笹川　６、7年前？

梅崎　高野先生は何年…？

高野　僕は、準備が1年で、その後に専攻主任を２年やって、それで、あなたでしょ？

梅崎　私、１年やっていますね。その次が武石（恵美子）さんかな？、それから八幡（成美）さん？　そういう順番だったと思うんですけど。その頃までは独立しないで経営学研究科の中にいた。

笹川　僕は大学院の中身のほうは全然タッチしていないけど、お膳立てはしました。川喜多さんに言われて。枠組みのところで藤村博之さんに何度も何度も頭を下げに行きました。「経営学研究科の中にキャリアデザイン学専攻を置かせてください」というお願いです。もちろんメールでもやりとりしました。ひたすらお願いして藤村さんから了解を取り付けました。そういう記憶がありますね。「鬼っ子」という話があったけれど、経営学研究科にしてみれば清成総長、平林常務理事がそう言っているから仕方がない、という感じでした。藤村さんが研究科長だったのかな？それとも、経営学研究科の人材育成コースの責任者、あるいは実力者ということだったのか

な？とにかくお願いしてお願いして、やっと「わかりました」と言ってもらえた感じだった。今にして思うと、藤村さんも経営学研究科を説得するのが、大変だったんでしょうね。経営学研究科にとっては、あまりメリットのある話ではないからね。だから、「いつ」ということは決めていなかったと思うけど、「できるだけ早く独立してくださいね。」ということだったと思います。言い換えると「できるだけ早く出ていってくださいね」ということ。それは、専攻ができた後の経営学研究科の教授会でも感じましたね。

梅崎　でもこのへんは、うちの学部に限ったことではなくて、岡本（義行）さんは政策創造研究科の設立準備をされたという話が出たけれども、ほかに政策科学やイノマネ（イノベーション・マネージメント研究科）も経営学研究科と部分的にバッティングしている。キャリアデザインもみんなで公共政策大学院に参加するという話もありましたね。そういうくっついたり離れたりの流れが常にあったから複雑です。大学院史で書くのはすごく難しい。

笹川　「バッティング」ということについては、それぞれ違った角度があったから、その点を分析してみないとよくわからないという気もします。ですが、社会人基礎力の諏訪康雄さん、岡本さん、川喜多さんあたりの人間関係がなかなか難しいというのを垣間見たことがありました。「キャリアデザイン学研究所を作ろう」ということで、清成さんと打ち合わせたうえで、ぼくがお願い文書を書いて、岡本さんと諏訪さんと、川喜多さんとぼくの4人で、キャリアデザイン学部の資料室で会うことになっていたんだけど、それがうまく運ばなかった。その席で、川喜多さんが「岡本先生も市ヶ谷に進出されるんですか？」って言って、空気が凍り付いてしまった。藤村さんとも、キャリアセンターのキャリア教育などについて、平山さんも出ていた会議でずいぶんと議論しましたが、けっこう「縄張り意識」があるようなところも感じましたね。

梅崎　分野的には岡本先生は中小企業論だから、あまり労働の人っていう意識がないです。諏訪先生は、労働法がご専門なので労働寄りですよね。

それで、大学院の設立が終わった後にまた、現代GPの採択という苦難が（笑）。

・現代GPの採択

金山　それでは、現代GP（文部科学省の「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」＝大学の優れた教育プログラムに対する財政支援）の採択の話に移りましょう。

笹川　これは学部立ち上げの3年目の学部長会議のときだったと思うんだけど、休憩時間に清成総長に呼ばれて、「笹川さん、こういうのあるんですが、ぜひ応募してください。内容的にこのキャリアデザイン学部と近いので」と言われたのが事の発端でした。その時の主任は、まだ平山さんですね。

平山　そうですね、多分、私が関わったのはプランのところくらいですね。ぜひ申請を出してくださいって言い残して。

笹川　それで、「さて、どうしようか」というところから始まった。選定段階でぼくも選定委員になったのですが、もちろん法政の申請の審査には加わりませんでしたが、名古屋大の寺田さんから、「法政はもっと『キャリア教育ってこういうものだ』という基本骨格のようなものをドンと出してくると思ってたんだけど、ずいぶん特化したものを出してきたので驚きました」と言われましたが、「法政のキャリアデザイン学部というのはみんなから観察されているんだな」と思いました。でも法政の内部の議論では、特化しないと通りづらいのではないかということでしたね。それで児美川さんの「大卒無業者ゼロでどうですか？」という提案をもとに、作文したという感じでしたね。飯田橋のエドモントホテルに3日間くらい缶詰めになって。

児美川　文科省はちょうど2006年から、補助金事業である現代GPの柱の中の一つに「実践的総合キャリア教育の推進」をいれた。それをちゃんと理事会は見ていて、君たちがやりなさいみたいな話があったんですよ。こういう学部を作った以上は申請しないわけにはいかないですよね。当時はそんな感じだと思いますけど。そして申請する以上は落ちるわけにはいかないという意識が大きくて、さっきの無業者ゼロなんてありえないじゃんってもちろん思っていながら、でもそういう打ち出しでやろうという感じになったと思いますね。

笹川　確かその時は細田さんが入試センターにいて、「とにかく尖らせないと

だめですよ」と、しきりと言ってました。

平山　文科省の申請ものは尖らせないと通らない。

笹川　さっきも言いましたが、寺田さんは、「せっかくキャリアデザイン学部が出してくるんだから、キャリアデザイン、キャリア教育の骨格はこういうものだというのが出てくることを期待していたんだけど」って、その後も言われましたが。

金山　GPが採択されて、学部教育の中ではどのようなプログラムを展開されたんですか？

児美川　現在の「キャリアサポート実習」のプログラムがそれですね。当時は「キャリア相談実習」って言ってましたけど、キャリアアドバイザーを雇ってプログラム作りをしたのが１年目で、このGPによる特任の助教として田澤さんに来てもらったのも１年目の後半でした。２年目からは実際に授業をやり始めました。

児美川　この授業は必修という設定にしました。１年生必修で15、16コマを展開しましたし、こんな新規の科目で非常勤講師を探せるわけもなかったので、すべて専任教員に科目をもってもらいました。そんな感じの、やや無茶な形のスタートでしたね。３年間の補助金でしたので、３年間が終わった時点では必修を維持するのは無理だろうと判断し，規模を縮小したわけです。

笹川　平林常務理事に言って「GP主任」という主任ポストをおいてもらいました。責任コマ数の1コマ免除と若干の手当てがでるという。山田泉さんが最後はまとめたかな？

児美川　一人増やしてもらって、僕もやったし山田さんもやられました。

金山　それが現在の体験系の授業になっているんですか。

児美川　今の「キャリサポ」はこのGPが引き継がれた形の授業なのですが、ただし、学年が違っていたんですよ。GPの時は新入生向けで全員必修だったんです。3年後に規模を縮小したときに、ほかの体験型科目と揃えて選択必修にする形で２年にあげたのが今の形になっています。

梅崎　当時学内とかも含めて3回実習に行かなくちゃいけないというハードルを設けていた。あと、効果測定の尺度を労働政策研究・研修機構の下村英

雄さんに作ってもらったんですよ。僕も心理学者じゃないから、その時はまだあんまりよくわかっていないけれども一緒に作った。その後、田澤（実）さんに入ってもらってから、分析範囲も広がり、最終報告書の執筆にも繋がりました。この測定テストは、ほんと色々な大学で使われてますよね。下村さんが「あんまり質問項目が多いと使えないから」と言って12問にグッと絞った。だから、授業中にも短時間でできるというのが好評だったんです。うちのキャリアセンターも今年からこの尺度を使っています。

笹川　このGPは、僕は最後はエドモントにこもって一人で書類作りをやったのですごく疲労感があるんですけど。今の梅崎さんの話を聞くと、GPは意味があった、価値があったと感じ疲労感が減りました。

梅崎　授業も残っているわけですから。

金山　スタッフの採用枠もそれでとれたわけですからね。

梅崎　田澤さんはたぶん、最初は任期付き教員というGP枠だった。

金山　確か教員枠は増えていないんですね。

児美川　枠は増えてはいなくて、田澤さんの枠は任期満了後は召し上げられる予定だったんですけど、ちょうど尾木（直樹）先生が特任枠に移られたので、田澤さんはその枠に着任した。だから人数は増えていないということです。

笹川　GP主任が今の体験主任なのですか？

児美川　ある時に、体験主任に名前を変えたんですね。主任の枠を確保できるように。

笹川　それから、キャリアアドバイザーを増やしたんだっけ？

児美川　もともといた4人とは別に、GP用に最盛時３人で、合計7人いたと思います。

梅崎　今は全部合わせて5人ですね。

笹川　まあ7人よりは少ないけど、当初よりは増えた。

児美川　当初１年目は2人しかいなかったけれど、４年間の間に4人まで増えて。

資料室の職員２人で１人枠に該当するといわれて、学部設立の時には４人までとっていいはずだったんです。

笹川　僕は責任者で渦中にいたから、実習科目のいいところ悪いところという評価が自分ではうまくできない。現場にふれるという点で、実習は大事だと思っているんだけど、梅崎さんと児美川さんから見ると、この学部の特徴は実習があるからというふうに言える？

梅崎　それは連立方程式のような面がありますね。亡くなられた外川（洋子）先生が担当していたもともと企業向けのインターンシップの科目を、今、酒井（理）先生たちが中心にやってるんですが、GPが必修になるとこのインターンシップが少なくなってしまう。それだと困るからGPの必修枠を選択必修に変えて、今もプログラムはあるんですけど、カリキュラム会議での全体調整の議論は起きますね。というのも、現在、外部の企業インターンシップが１年生から長期間でやっているから。そっちとバッティングするような環境になってきています。学部設立の最初の約10年は3年生の10月までは完全に授業に集中してくれて、インターンも大学のインターン・体験学習はするけど、3年生の10月から就職活動に変わるという流れでやっていたのが、今は１年生から外部のインターンシップをやっている。今、どういう形でもう一度、体験系の授業作っていくかという話になっています。

平山　現代GP後も実習費はとっている？　学費の中でとっているんですね。じゃあやっぱりやらないとダメだ。

笹川　GPの審査員を4年間やっていたら、GPのけっこうくだらない側面も見えたりもしました。大学ではなく、大学が委託した業者が申請書を書いて、しかも面接の時にその業者を同席させてるんですよ。これを担当課長がOKしているので、ビックリした。政策立案能力のない小さな大学や短大にもGPを取らせて全体として弾みがつくように誘導するということだったのかもしれないけど。だから、書類は書いてあるけど、実は中身は空っぽで、採択されてから、さて何やりましょうっていう大学や短大もあった。法政はかなりまじめだけど、そういう側面がゼロでもない。GPをとるのに大学は汲々とさせられるんだけど、競争的に資金をとってくるのは大事とはいえ、とったら意味のある使い方をすべきじゃないかと、釈然としないものを抱えていました。だから、この学部としてはGPはこういうふうな意味が

あったとか、今にこうプラスに影響しているとか、そう結論づけてくれるとうれしい気持ちです。

金山　笹川先生がおっしゃったように、現代GPを採択されたことによって、学部としてはこういう成果があったということについては、児美川さんから何かありますか？

児美川　体験型科目の整備につながったのは確かだろうということと、基本的にはビジネス系に向いていたインターンシップを、教育系の学生に向けてある種のピアサポート活動みたいな形を作ったという意味は大きかったと思うんですね。それが今でも根付いているわけじゃないですか。

笹川　そこは強調してもらいたいですね。山田さんは、分厚い最後のまとめの冊子を作るのに相当一所懸命やっていたからね。山田さんは、本当に誠実の塊みたいな人だから。

児美川　相当大変だったことは僕も覚えていますよ。対外的にもいろいろ発信しなきゃいけないし、報告書を書かなきゃいけないし、年2回シンポジウムをやらなきゃいけないしということで。

金山　相当ボリュームのある報告書を作りましたね。

児美川　でもGPをやってから学部がだいぶ有名になり、いろんなところに呼ばれるようになったということもあります。

平山　GPは横展開させないといけない。自分の学部だけでやってるのではなく、その成果をあまねく広く大学に展開しなくてはいけない。

笹川　浜村さんが常務理事の時に、それこそ藤村さんがキャップで、学部の専門と結び付けたキャリア教育の展開というGPに採択されたことがありましたね。児美川さんも、ぼくも学内委員でしたね。

児美川　就業力GPとして、その後そういうのもありましたね。

平山　GPはシンポジウムや報告書はきっちりとやらなきゃいけない。予算がつきますからね。

笹川　予算もあるけれど、学内的には「GPとったんだね」と居心地がよくなった。新参者に対する冷たい眼差しも学内にはいっぱいあったけれど、そういうのが少し温む効果があったのは事実です。

・教育活動について

金山　それでは次に、教育活動についてはどうでしょうか。新入生全員の合宿というのをやりましたよね。あれは学部の事務方では平山さんが主任でしたから段取りなどで苦労したと聞いています。その辺のお話をお願いします。

平山　大変でした。初年度は学生がどれだけ入ってくるかもわかりませんでしたが、動ける人間も事務しかいなかった。先生方は当然、プログラムの方で協力してくれましたけれど、運営側がなかなか手薄だったんです。最初の年は確か茨城県石岡市の大学の合宿所で二回転させたんですよね。これがまた時間も手間もかかって大変だったんですね。それで、次の年からは1回でやろうと河口湖のホテルへ行って。このときに２年生の学生から運営スタッフを募集しました。学生スタッフは、事前にいろいろ仕込むのは大変なんですけれど、やり始めたらすごく活躍してくれて、おかげで合宿の運営はすごく楽になりました。それがだんだん先輩たちから後輩に継承されて、３年目からは自然とそういう学生スタッフが育った。すごいなというほど自主性が出てきたりアイデアを出してきたり。新入生合宿の学生スタッフにはおそろいのＴシャツやジャンパーも作ってあげましたけれど、そのスタッフたちとはけっこう濃い時間を過ごさせていただきました。大変でしたが、あれはすごくいい経験だったかなと。私が異動する際も彼らに色紙をもらったりして個人的にもすごくうれしかった。ただ、なんで合宿なのか、なんて当時の僕は思っていました（笑）。

平山常務理事

金山　新入生合宿はなぜ実施したのですか？　元々計画していたものなのか、どういう考え方のもとに合宿を計画したのですか？

笹川　１年生は最初に全員で集まってオリエンテーション合宿をすることを、もともと計画していた。法政大学を第一志望で入学してくる学生ばかりと

は限らないので、今日からは心を切り替えて４年間法政のキャリアデザイン学部の学生をやるんだよと確認し合うという位置付けだったんです。これは、川喜多さんと小門さんが熱心だった。金山さんも野田の醤油樽の職人の玉野井さんをアレンジしてくれて、学生は集中していましたね。

児美川　鉄は熱いうちに打てみたいな話だったと思うんです。グループワークをやるので、そういうことやる学部だということを入学の時点で学生たちに覚悟を決めてもらうという、そんな議論をしていたと思うんですけど。

平山　「キャリアデザイン学部は学生たちがわいわいグループを作って混じり合う学部だよ」ということを、当時、入試の学部説明では言っていたのですけど、勘違いして「キャリア＝人生、人生を深く考える」みたいな感じに一人で人生について考える学部だと考えて、友達とあまり混じらないような子も中には一定数入ってきていたので。そういう子たちにとっては合宿で一緒にやるのは刺激になったし、児美川先生が言ったようにこういう学部なんだということがわかったんじゃないですかね。私は単純に、笹川先生が合宿好きだからやってるんだと思っていたんですが（笑）。

笹川　まあ、それもあったかもしれない。そのころ、児美川さんが、「ぼく、笹川さんの好きなこと知ってるよ。図を描くことと合宿」と言っていたけど。

金山　他学部にはなかったのですか？　他学部の学生と比べると、キャリアデザイン学部では合宿をやったから、学生のモチベーションが違うということはありましたか？

平山　他学部には新入生合宿はないですね。モチベーションも違いました、当時は。まとまりはよかったと。300人弱の学生は、サークルどっぷりの子もいるし、いろいろな活動のバックボーンを持っていますけれど、学生スタッフの発想が生まれてくるちょっと前だったので。その後、オープンキャンパスの学生スタッフや学生ステーションのスタッフだとか、そういう学生スタッフ活動がどんどん生まれてきましたけど、それが生まれる前はキャリアデザイン学部の学生たち、特に最初の頃に入ってきた学生はそういう意欲をもっていて、それが芽になっていったような。つまり、当時はクラスで親しくなるかサークルで親しくなるか、そんな感じだったんですけど、でももう一つの選択肢として学部で学生スタッフ活動をやることによって、

一定のまとまりが生まれたんですね。特に低学年に。上になればまた、ゼミとかで交流できるんでしょうけど。現在のピアネットに通じるそういうまとまりとして活動する志向がうまれたのかな。最初の年、石岡合宿へ行くのに正門にバスを止めてキャリアの学生が乗ってくるので、他学部からキャリアは修学旅行へ行くとかいわれて恥ずかしい思いをしたという学生もいましたけれど。合宿はあのときの時代のキャリアの大きな特色だったんじゃないかなと思います。入門ゼミとして授業自体は２単位で、合宿のあとフォローで2、3回授業があって、ゼミによっては秋合宿もやってましたよね。ホテルで何かパーティーかなにかもやった。

笹川　名刺交換会をやったんだよ。スカイホールで。

児美川　そうそう、名刺交換会もやりましたね。

平山　合宿以外にもああいうことをやって、これはなかなかおもしろい学部、おもしろい授業だなと思いましたけれども。合宿はなかなか苦労した思いがありましたけど、教員と学生と我々スタッフが一体感をもってやっていたというイメージをすごく強くもっていましたね。

笹川　今は、法政大学人事部主任の木部真希さんは人間環境学部の学生のとき、学生部（学生センター）のスタッフだったんだよね。本人が言うには、その経験で大きく成長したと。それもあって合宿しようと言ったのかもしれない。全体としては、さっき児美川さんがピアサポートって言って、今、平山さんが言ったように、いろいろなかたちのピアサポートができた。

僕が1988年に赴任したときには、まだ、中核派がこの市ヶ谷のキャンパスに横行していて、学年末試験がなかった。その頃の学生担当常務理事の鬼塚さんが「笹川さん、あそこの黒い鉄のフェンスをとりたいんだ」「取れるんですかね」「いやー、とらなきゃダメだ法政は」と言っていたことを覚えている。80年代から90年代初頭のある時期まではキャンパスもけっこう殺伐としていた。旧学生会館にしょっちゅう警察が家宅捜索に入ったりしてね、その度に教員の立ち会いをしてとか、そういうのがずっと続いていた。だから、僕が学生部をやっていたのが90年代の半ば、97-98年、その頃、学生部には学生対策の１課、２課、と奨学金などを扱う厚生課があって。「学生部は厚生課が中心にならないとだめだよね」って、しょっちゅう、中核派の学生に殴ら

れたりしながらずっと話していた。そういう時代の後にピアサポートセンター、ピアサポートシステムが、キャリアデザイン学部から出てきたことが感慨深いですね。今、平山さんの話を聞いて、「学生たちが中心の学園」という言葉を僕はあまり使わないけれども、そういう雰囲気を、基礎ゼミを含めてキャリアデザイン学部が醸したという面があったんだな、と。

平山　それ以前の法政大学では学生と一緒に何かをするという発想はあまりなかった。先生方がゼミ合宿に行くのは当然ありましたけれど、職員が学生と直接一緒のことをやる機会はあまりなかったんですね。たまに学会のお手伝いをする程度。このあたりからだんだんと教職学協働という発想やピアサポート、学生サポート活動というのが生まれてきた。

金山　全学部にそういう影響を及ぼしたんですか？

平山　及ぼしたのではないですかね。

笹川　そうだとしたら、それはすごいね。学部、学部生、法政大学、法政の学生への貢献と成長。前後して、夏の受験生向けオープンキャンパスのスタッフなんかも充実してきましたね。小林ふみ子さんなんかはけっこう熱心にやっていたし。

高野　市ヶ谷のオンキャンの代表者が僕のゼミから2代続いて出たことがありました。学生たちはそういう自分の体験があって、こうしたピアサポートなどを後にバトンタッチしていくという流れができたのですね。

・体験型科目の展開

金山教授

金山　次は体験型科目の展開についてお聞きしたいのですが、先ほど現代GPのところで体験型科目の話は出ましたので、補足する形で進めたいと思います。体験型のインターンや国際等、いくつかプログラムがあるわけですが、もともとはGP以前から学部のカリキュラムにあったものですか？

平山　小門（裕幸）先生がやっていたインターンシップは入っていましたね。

金山　その辺はどのような経緯ですか？

児美川　「キャリア体験学習」は最初からあったんですよね。こういう学部だからやはり体験型の学びは重要なので、学部新設の最初からカリキュラムに入れていた。ただ、北京に行き出したのは、設立後ちょっと経ってからですね。

平山　キャリア体験学習は２年生からだったと思うが、インターンシップの担当は小門先生とか、外川先生とか。行き先は企業が多かったですね。ほかには団体とか。

児美川　地方自治体にも少数だけど行っていたと思います。

平山　当時は契約関係がめんどうだった記憶があります。

金山　必修ではなく選択だったんですか？

児美川　完全に選択科目でした。

梅崎　メインの選択科目が企業インターンシップでした。GPで１年生の相談実習ができて、GP終了後その科目を必修から外した時に、企業・学校・国際を全部同じ選択実習の枠に入れて、多様な実習先・プログラムからの選択にした。

笹川　国際の話ですが、国際は最初から組み込まれていたわけじゃなかった。2003年の4月に、河口湖で最初の１年生合宿やったときに、教員が泊まっているホテルの屋上に露天風呂があったんですよ。桐村晋次さんに、そこに

呼ばれて、「笹川先生、趙先生と北京大学にパイプがあるのにこれを使わない手はないですよ。北京大学との学生交流プログラムを作りましょう」っていう提案があった。桐村さんは、大学生のときに日本政府がやっていた「青年の船」に乗って、とても視野が広がったと、後に言っていましたが、その時のご自分の体験と重ねての北京大プログラムの提案だったのだと思います。それで、趙さんとも相談して、もちろん、執行部の川喜多さん、児美川さんとも相談し、教授会に提案して議決をしてという手続きを取ったうえで2週間の北京体験プログラムを作りました。北京大での中国語授業と、中国についての講義、三井物産での研修は法政の学生と北京大の学生とが混ざって受けました。頤和園や円明園などの市内プログラムなどです。第1回は2006年だったかと思いますが、そういういきさつもあって、最初の引率担当者は、趙さんが通しで、桐村さんと私が1週間ずつ担当しました。異文化接触、とくに同世代の中国人学生との交流・協力体験が学生に与えたインパクトは大変大きいものがありました。2期生の笹川ゼミのゼミ長のSさんも参加したのですが、北京から帰って北京大に留学したいと親に言ったけど反対されたということで、大和証券に5年ほど勤めてから全日空を受験して、国際線のキャビンアテンダントをしています。

金山　現代GPはその時ですか？

笹川　両者は直結してはいないけど、同じ年に始まりましたね。

金山　国際とはつながっていないけども、体験系の最初の科目の上に現代GPが入ってくるわけですか？

児美川　キャリア体験学習は最初からプログラム化されていて、現代GPは３年目くらいから１年生必修科目として置いたんです。

梅崎　それで単独でやっていたのを選択必修としてもう1回まとめなおしたという流れですね。

金山　昨日、学部の質保証委員会で在学４年生からヒアリングをしたんですよ。そうしたら全員がこの学部を選んだ理由の中に体験系授業があることや、グループワークができることを挙げた。そして実際にそういう経験をして本当によかったということを皆、言っていました。

笹川　それは今後、学部の特色として「売り」になりますね。

金山　バイアスは多少あったとしてもね、この科目はあってよかったみたいです。

平山　インターンシップを授業に取り入れたのも早かったんですよ。今はけっこういろんな学部でやっていますけれども、当時は珍しいほうだった。

梅崎　京産大さんなどがインターンシップにけっこう力をいれていて、企業と共同授業開発などをやっていました。学部レベルというよりも全学共通プログラム主導という感じでした。その点ではキャリアデザイン学部内で体験を設けるのが法政大内でも早かったのではないでしょうか。ただ、他の学部もやりだすとうちの特徴がなくなる状況がありますから、新しいことをまたやらないとだめです。

笹川　学生にとっても「現場」というのはいろいろあるわけですが、同年代の若者で、環境が違う中で真剣に生きて、学んで、働いている若者と接する、交流する、話す、楽しむという体験は意義深いものがありますね。いい意味での「衝撃」があって、人それぞれではありますが、「人生、人生観がかなり変わった」ケースも少なからずあると思うんです。キャリアの大学院の6期生で、僕の最終講義にきていたベネッセの人財部長をしている鬼沢（旧姓飯田）裕子さん、彼女はぼくの都立大非常勤時代に3年間「笹川ゼミ」にいたのです。その彼女が2年生の時、1982年2月に、長野県連合青年団の青年問題研究集会があって、幾人かの学生を連れて行ったのですが、飯田さんはそこで中卒、高卒の同年代の若者たちの生き様や視野にふれて、それが衝撃的だったっと、今でも言っています。同じ世代の人でこういう生活をしている人がいるんだっていう、知らない世界を知ったこと。異質なものに出会うことを通して、それについて興味をもつと同時に、自分自身を振り返る。その体験学習を若いうちにやっておくということが大事なんだろうなと今、改めて思いますね。

平山　この頃から大学がその場を用意するようになりましたね。それまでの学生は勝手に自分で、海外一人旅とか日本一周自転車旅とかをやっていたと思うんですけれど、この頃からそれを大学として用意することになって、今はいろいろな大学がそういう体験型の科目をやっていますね。手間はかかるようになったとはいえますけれど。

金山　これもキャリアデザインの先駆的取り組みが他の大学に影響を与えたといえますか？

高野　学生に手間暇をかける学部だったな、という実感がありますね。

平山　当時は私の出た法学部などでもゼミの学生には手をかけているけれど、そこへ至るまではただ授業を受けているだけという感じ。

金山　本当にその頃は学生に手をかけてましたね。

梅崎　北海道の夕張市へ学生を連れて行くのは、ボランティアセンターの関連ですか？

平山　あれは宮崎（伸光）先生。

金山　法学部の宮崎先生が学生センター長をしていた頃でしょう。

平山　学生センターで最初夕張のボランティアを実施した後に法学部で授業化して連れて行ったんじゃないかな。まさにそうした体験学習があとでどんどん他学部に取り入れられた。

笹川　「国際」の話では、北京大学プログラムの後継の台湾プログラムの話も少し付け加えたいと思います。これにはいろいろと曲折がありましたが、台湾の国際体験学習を2018年度から実施をしてきました。いまはコロナ禍で外国へは行かれないんですが、松尾さん、アドバイザーの栗山さん、日台教育センター所長で、兼任講師を務めてもらっている郭さんたちの努力で、外国に行ったのと同等の教育効果をあげている授業も経常費特別補助の対象になるというので急遽、色々書類を作って、申請しました。それで齋藤事務主任の話によると、他のプログラムと併せて基準を満たしたおかげで、かなりの額の補助金が下りたということです。このプログラムは、いま総長の廣瀬克哉さんが副学長・常務理事のときにとても評価してくれて、その時の佐藤厚学部長の話では、廣瀬常務理事が、学部長会議で異例の時間を割いて台湾プログラムについて積極的に言及されたと、学部教授会で言っていましたね。

2018年、19年とぼくも2年にわたって引率で行きましたが、台湾の国際体験の学生も北京大のとき以上に大きく視野が開かれて、進路変更や台湾の学生とのつながりも継続されているのですね。異文化体験で学生はやっぱり変わるんですよね。

例えば半導体の会社で世界のトップを走ってるのは台湾なんですが、日本の学生は、台湾は小さな島だと思っている場合も少なくないけど、行ってみたら想像とは全然違う。2週間、提携校である元智大学の学生と法政の学生が、学生寮で生活を共にする。それによって、親しみが湧くし、お互いに友だちになる。いろんなことを教え合って。中でも衝撃的なのは、法政の学生は、一部の例外を除いて日本語と英語くらいしか話さないけど、台湾の学生は台湾語、北京語、英語、日本語と4言語くらいを話していたりする。「日本は進んでいると思っていたけど違うじゃん」というわけで、そういう衝撃は大きい。元智大学の呉翠華先生や学部長さん、国際部長さんたちの全面協力、日本台湾教育センター責任者、それから法政の台湾人卒業生の「法政大学台湾校友会」の全面的な協力をもらってのことですが、ほんとうに、学生はずいぶん変わる。帰ってきてから、台湾、大陸中国、韓国、オーストラリアに留学あるいはワーキングホリデーで行く学生たちも10人中4人だったりすることもあり、口下手な男子学生が積極的に話すようになったりもします。

また、事前事後の授業で台湾について学んだり、自分たちの体験を冊子やポスターにまとめたりして、その指導を丁寧にすると、学生たちが本気になってくる。まとめる、自己表現すること、チームで働くことが楽しくなってくる。そういう変化もあります。

ただ、選抜するときに、1つ迷いがありました。それは、国際体験学習に連れて行く学生を10人選ぶときに、いかにもできそうな人だけ選ぶのか、それともぼーっとしているけれども意欲がある人も混ぜるのか。僕は後者でやっていたんだけども。教育的配慮でいえば初めて外国に行くような学生もいたほうがいいと思うんだけれど、でも海外企業インターンシップを継続的にやる上ではやっぱり応募があった中での精鋭を連れて行った方がいいのかな、という疑問です。先方に対しては、「できる」学生からの方が良いかとも思うのですが。児美川さんはどういうふうに思いますか？　僕はいつも迷う。

児美川　応募数が定員内なら全員連れて行けばいいから問題ないんだけど。はみ出した時、どうやって選んだのかが問われるという問題はあると思うんですよ。バランス重視といっても、あんまり‥という人を選ぶのは難しくないですか。枠を超えたら仕方がないところがあるかなあ。

笹川　「あんまりだ」という学生を選んだことはないですが、「できる学生」からとっていくことと、その他の要素とのバランスも必要かなとも思って。

児美川　それはありそうです。

・キャリアアドバイザーの配置と評価

金山　次はキャリアアドバイザーの配置と評価についてですが、先ほどの現代GPの話題に補足して、アドバイザーを入れてよかったことなどを話してください。

高野　キャリアアドバイザーという制度がわりにうまく機能した、その皆さんにがんばっていただいたということは、しっかり自覚しておく必要があります。教員だけで学生の教育・指導をやっているわけではない。法政大学は工学部の助手問題があったことなどから、教員以外の教育職の設置に対してはハードルが高い面がある。

僕はある社会学部の先生から、「キャリアデザイン学部でキャリアアドバイザー制度を作ったのは非常にいいことですね」、と言われたこともありました。教員だけだと指導・支援も大変だったという理由もあったけれども、アドバイザー独自の役割も開拓していったわけです。そういうアドバイザーの中には、他大学でキャリア教育や支援をする人材も出てきて、大学の専任教員になった方さえ出てきています。つまり、大学のキャリア教育の専門家になるキャリアパスの１つを創ったということが重要だと思います。そもそもは笹川さんがアドバイザー制度を作ることを提案したの？

笹川　あれは川喜多さんの提案です。設置準備委員会の中で児美川さん含めて合意していたんです。原資も資料室の職員は専任枠でなくてもよいので、その専任枠の予算をアドバイザーに当てることで常務理事会に了承をしてもらった。

高野　ちょっと別の分野の話をすると、本学の教職課程における相談指導員は、身分上は専門嘱託扱いです。だけれど、やっていることは教育者といえます。社会学部教員で大学執行部の一員だった平塚（眞樹）さんに、「教育職というポジションを作った方がいいのじゃないか？」と話したことも

あります。つまりアドバイザー職も教育職として位置付けるべきではないか。今もまだ事務職扱いですよね？

児美川　もちろん。理事のところに話をもっていったことがあるんですが、法政大学としては助手問題を抱えていた経験があるのでいやがってなかなか進まないんです。

高野　だけど、もうそういう時代じゃないとずっと言っていかなきゃいけないと私は思っています。大学教員ではないが学生を教育・指導・支援し、同時に学生と教員を結びつける媒介者という職種は大切です。

平山　キャリアアドバイザーのときもそうだったんですけど、誰の指揮命令下にあるかが曖昧で、専門嘱託の身分なので指揮系統は事務系列なんですけれど、学生の指導をしたり教育的な面も見ていて、教育との中間にあたることをやっている。誰の指揮系統か悩む人もいれば、まったく事務の言うことを聞かない人も中にはいて、なかなか扱いづらかったなという印象もないことはないんだけど。それはやっぱり指揮系統がはっきりしないから。今だと教務助手などの教員職のポジションがありますので、そういうふうにした方が。

笹川　そういうポジションがあるんですか？そうだったら名称は「キャリアアドバイザー」で職務名称は嘱託職員でなくて、「教務助手」にした方がいいような気がしますね。これは、資格課程についてもいえることかもしれないけど。

平山　あるんですよ。

梅崎　先ほどお話にあがっていた助手問題というのが僕にはいまいちわからなくて。例えば他大学では助手の位置付けが変貌して身分として残っているところもあります。そして、その人たちが授業をどんどん担当して、開発して、運営して、教員と共に開発する人になるんだけど。法政では、助手制度がダメだと。

高野　工学部の助手問題は、理工学部への改組のときにその人たちを専任講師にしたのだよね？

児美川　文学部もそうじゃないですか。要するに大学に残る手段がないから強引に専任にしちゃって、当然反対する人もいて、後々まで尾を引く。い

くつもの学部でその問題があったから、理事会は嫌った。

梅崎　継続雇用の問題なのでしょうか。

平山　現実には他学部にも助教はいるので、置けないことはないが、キャリアアドバイザーはきちんと事務系列の職種でわけているんです。だから残業の管理などもしなければいけないし、裁量労働じゃない。ポジション的に、いわゆる嘱託みたいな位置付けで雇用したけど、でも難しかったんですかね。キャリアアドバイザー運営委員会みたいなのを作っていただいて、アドバイザーの担当の教員を配置してという立て付けにはなっていましたけど。

・カリキュラムの見直し

金山　次はカリキュラムの見直しについてお聞きしたいと思います。今もカリキュラムの見直しを学部でやっているんですけども、過去にもやはり完成年度のところで1回やっているわけですよね。そのあたりの振り返りをしたいと思いますが、いかがでしょうか。

平山　最初のカリキュラム委員会は児美川先生ですよね。

児美川　GPが入った時の微調整ではなくて、大きくカリキュラムを変えた最初は、高野学部長時代です。それで僕が委員長で、ああだこうだいいながらカリキュラム改革をやりました。

金山　最初は学部を運用しながら、こういうところを修正していこうと。それを反映するかたちで改革したと思うんですけど。

児美川　そうですね。その前の段階で、学生の履修動向の調査を八幡（成美）先生などが中心になって実施してみたんです。そしたら、学生たちは専門分野とか科目間の関連性とか系統性とか、そんなことは一切関係なく履修していたことがはっきりとわかってきたんですね。要するに曜日時限の都合だけで履修していることがかなり明々白々になったので、必修はもちろんあるけれど、もう少し科目の枠や縛りを大雑把にでもかけて、プログラム全体で学生を育てなければいけないなというのが、その時の一番の考え方だったんですよ。初期の頃の教授会の議論は、「自由にやらせていても最

後はゼミで面倒みればいいや」という論調だったと思うんですけれど、ゼミで面倒を見ると言っても限界があるんだから、やはりそれぞれの分野ごと領域ごとのプログラムで育てようということで。それで３分野もできたし、各分野の基礎科目ABCDの体系もできた。同時に体験型学習は講義とゼミをはさむ位置付けなので、それは選択必修で２年次で全部やろうということになりました。もちろんそれも動かしていくとまた問題がいろいろと出てきたわけで、現在またカリキュラム改革をやってるわけですけれど。

高野　『キャリアデザイン学への招待』（金山他編、2014年）の中で、僕が学部カリキュラムについて書いたのを再読すると、最低必修単位を124から132に引き上げたことや、児美川さんが今言ったように、初年度2012年以降の入学者はどこかの領域を重点領域として位置付けて選択すること、という改変があった。

児美川　自分の領域から36単位以上を履修するといった枠ができました。

高野　学部の先生方には、各領域の独自性を強調する方々と、もうちょっとお互いの領域を行き来するような制度にしたほうがいいと言っている人たちがいますね。これは、専門性と総合性の葛藤というか、キャリアデザイン学部の宿命みたいなところがあります。カリキュラム論で言えば、シークエンス（深まり、系統性）とスコープ（広がり、学際性）を、どう組み合わせるかという根本的な問題を孕んでいるわけです。

例えば、発達・教育領域を、学生は極端にいえば教師養成と限定してとらえてしまいがちで、ライフキャリア領域はもっと広く学べる、学生にとっては何でもできるような感じがある。だから、ライフは焦点というか自分たちの売りを明確にしたいし、教育は教員養成学部にならないように、学際的な学びを目指したい。ビジネスキャリア領域は、専門性・系統性と総合性・学際性のバランスを、今のところとれているという教員もいるようです。

梅崎　1回目のカリキュラム改革でビジネスキャリア入門を必修で作った時の議論は、ビジネスのこの基礎を学んでいないと遅くなるから、ゼミを選んだ時に必修のしばりをかけたわけです。ただ、それをやると学生の不満も多くなる。でも、自由に選べるといい部分もあるけれど、積み上げができないという両立の難しさです。これは教員としてキャリアデザイン学部に

20年いると、自分の研究にはめちゃくちゃいい環境なんですよ。常に学際研究をしているようなものだから。教育でやると学生にどのようにコアを作ってもらうかが課題ですね。どのバランスがいいのかは、いまだにわからない。

梅崎教授

高野　つまり梅崎さんなんかの現役の研究者はそのゆれやバランスを自覚しながらやるけど、学生のようにその自覚がないと、単位を取りやすい楽勝科目を履修するとなっちゃうわけですね。

梅崎　そうですね。どこかで自分の領域を選ぶタイミングがあって、それでサブ科目もあってという選択をしていく必要があります。我々は自分のキャリアとしては、既存の学部・研究科から学際学部にきているから、大丈夫なのですが、最初から選択肢が多い学部では、どのように絞るかが見えにくい。

金山　さっき言った学生への質保証委員会のヒアリングで、今のことに関連して聞いたことは、教育という意味において学生たちはキャリアデザインが理解できないというんですよ。１年生の時に授業のなかで、「キャリアデザインとは何か」をしっかり教わりたかったっていうんですよ。例えばキャリアデザイン学入門はオムニバスで３領域から展開していますが、そうすると各領域の先生は自分の領域の話をするっていうわけですよ。それを統合してもこれがキャリアデザインであるということを理解できなかった。学生たちは就職活動の面接時に必ず「キャリアデザインって何？」と聞かれる対策として、先輩からは学部の説明をすればよいと言われたといいます。キャリアデザインという本質がわからないのでそうお茶を濁して就活をしている話を聞きました。これが例えば経済学や法学部なら概論的な授業がありますよね、１年生の時に、そういったものをキャリアデザイン学部で学びたかったと言っていました。

梅崎　どうしても教員が自分の分野に引きつけて語っちゃうので難しいですよね。

平山　社会全体にもそのようなものがあって、時代の流れによって専門性が

ないとダメだという時もあれば、今みたいに総合知や学際的な素養に寄っていく時もある。学際学部の宿命ですよね。

金山　ビジネスはまとまっているっていうけどさ、逆に我々ライフのなかでは教育もビジネスもどうなのか逆のアクションがあったりします。それは結局何かっていうと、それぞれの教員の学問領域の相互理解が不十分になっているという問題がどうしてもあるのかなと思うんです。学際学部というならば、相互理解は不可欠ですよね。学部設立のときに教員合宿をしましたが、意見を出し合うことで異なる学問領域同士が理解しあうような環境がありましたが、今はそのような環境ではないことが多少は影響しているのかなという気がするんですよね。そのへんはいかがですか？

高野　金山さんの言う通りだと思う。カリキュラムの問題としてどうするかもあるでしょうが、教員同士でもう少し学問論をディスカッションするほうがいい。教員同士で「あなたの専門領域からはキャリアデザインをどう定義し位置づけますか」みたいな議論の場（アゴラ）を立ち上げ、積み上げることが必要な時期に来ているのかな。

25周年？の事業に向けて、これからの3年間ほど、自由闊達に、見解が対立してもいいから議論する。その際、さっき金山さんが紹介した4年生からヒアリングした要望や不満も議論の素材にしたり、外部のスピーカーにも参加してもらったりして、教授会内部でディスカッションをやる。それを、可能で必要なら学生にも公開する。教員が自分たちのミッションやコンセプトを学生に示さないと、この先の学部の展望は開けないのでは？

笹川　高野提案に全面的に賛成です。

平山　中野（貴之）先生が着任したときそんな話をしていました。中野先生は会計学をキャリアとどう結びつけて教えるのかを悩んでいたけれど、就職というのはけっこう大きなライフイベントで会社選びというときに財務書類を読むのは大事だからと、キャリアと結びつけて話すといっていた。そのヒントを合宿で得たようですよ。

高野　今の話に続けていうと、僕、教授会かなんかのときに、個人の研究と…

笹川　自分自身の授業について語るというプログラム。ぼくも報告した。

高野　僕自身が報告したし、教員合宿でもそんなことをやらなかったっけ？

児美川　それぞれが書いた本を読んでコメントをもらうといった学習会をやっていたけれど、いつの間にか立ち消えになっている。

笹川　それは、ぼくが中心になって5－6回くらいやった。教員が書いた本について、他の教員が報告者になって論評する研究会です。教授会当日にバタバタして中止になったときがあって、そこから先は立ち消えになった。

児美川　それでとだえたの？　予定だったのにやらなかったから次が決まらなかったということなんですね。

笹川　というのが事実の話で、ある時まではそういう試みをやっていた。そういうのを復活させることが大事だと思うけど、その頃、ぼくが感じるのは、他の人の研究にはあまり興味がないという雰囲気も出始めてた。自分のことで精いっぱいというか。だから、学部としてきちっと位置付けないと難しいと思う。25周年を機に、そうした方がよいように、ぼくは感じます。その方が、教員集団として求心力が出てくる。

3.　卒業生の動向

・どのような学生たちを輩出してきたか

金山　次に卒業生の動向として、どのような学生たちを輩出したのか、学生活動の表彰、助成も含めていかがでしょうか？　こういった学生がキャリアデザイン学部を卒業したからこそこういう学生たちを輩出できたんだという思い出はないですか？

児美川　こういう学生っていう意味じゃないんですけど、僕の感覚だとうちの学部の学生だけじゃなくて、国際文化や人間環境学部でも一期生、二期生はやはりユニークな層が来ている。で、われわれもその時のボーナスを最初はある程度使えていたから学生スタッフが育ったりといったことがあったと思うんですが、10年も経った頃からそんなボーナスは使えなくなって、この学部らしいユニークさみたいなものが見えなくなったなという感覚がすごくあるんですね。だからといってまた新設学部からスタートするわけにはいかないから、その中でどうするかはけっこうな課題かもしれな

いと思います。

高野　大学院独自で出した調査報告書の『キャリアデザイン学研究調査報告』（2006、2007）の中で、上西（充子）さんが、入門ゼミの一期生のことや、先輩から後輩への学部文化の継承も書いています。上西さんはデータもとっているよね。梅崎さんもキャリアの学生のデータをとっていたのかな？

梅崎　GP以降ですね。今はキャリアセンターに統合しちゃっているんですけど。卒業生調査とかも試行錯誤しました。

高野　先に触れた2007年の調査報告書では、一期生にとっての４年間というデータをとっているのですよ。そういう学生のデータをさっきの児美川さんではないですけども、おそらく今のほとんどの教員は知らないと思うのです。それも参照してもいいのですけど、これからのために学生調査の素材にして、これからの学生像あるいは人材像を話す機会を作ればいいと思います。笹川孝一編の『生涯学習社会とキャリアデザイン』（法政大学出版会）はいつでしたか？

笹川　最初の？　2003年ですね。

高野　最初が2003年で、今度のは20周年なんだ。今度はそういう編集で本を作ればいいんじゃないか。教員全体が何がしか書くというのでもいいし、データをもういっぺんとり直すという機会にすればいいと思うんですけど。そういうカルチャーがあるんでしょ、まだ？　一緒にやろうって。

金山　ではその先は、今後の展望として次にうかがいましょう。

4.　今後の展望～ 20周年を迎えるにあたり課題と展望～

金山　キャリアデザイン学部開設から20年を迎えるにあたり、思うことを何でもけっこうですので、お一人ずつお話ししていただきたいと思います。

笹川　今日は学生研究発表会というものがどういう意義を持ったんだろうという話ができなかったので、後でちょっと議論したい。それから同窓会が立ち消えになっちゃったけれども、20周年だから再建してもいいのかな。それで今の学生の追跡もできる。今後の課題でいえば、やはりキャリアデザイン学の構築。さっき高野さんが言っていたように、専任教員ひとりひ

とりが「これが私のキャリアデザイン学」というものを出し合う。「キャリア」「キャリアデザイン」「キャリアデザイン学」この3つを少なくとも定義する。そして、お互いにコメントし合う。それと、カリキュラムや教育方法とを重ね合わせる。それに尽きると思います。それができれば、この後も発展すると思いますが、それができなければ、尻すぼみになって、やがてはフェイドアウトしてしまうかもしれない。

高野　言い残すというのが好きな方じゃないのですが、今日話題に出ていないことでいうと、私が学部長だった頃は、年に2回学部長室で国際文化学部など市ヶ谷の新設学部、４文字から８文字のそういう学部同士の学部長たちが懇談していました。市ヶ谷キャンパスの中で、もうちょっとお互いの単位互換などの融通をつけようということも含めて話をしたわけです。大学院も同じことで、キャリアが最初は経営学研究科にあったということもあって、同研究科やイノベーション・マネジメント研究科などとも単位互換をしています。今でもやっているよね？

梅崎　ありますよ、今も。

高野　何年前かな、政策創造研究科の石山恒貴先生は我々と非常に近い研究をやっておられて、院生から彼の授業に出ていますと言われました。キャリアデザイン研究所というかどうかは別として、そういう研究所を立ち上げるにふさわしい教員や人材は、キャリアデザイン学部の中だけでなくて、市ヶ谷キャンパスの中にもけっこうおられるわけです。梅崎さんは多摩キャンパスにもつながりがあるのかもしれないけれど。研究所を創るためにも、学部の教育研究を充実させるためにも、もうちょっと学内連携をやるようにならないと、独自性は大切ですが、分離するばかりじゃダメなのではないかなと考えています。

児美川　僕は、学部のコア・アイデンティティみたいなものをだんだん自覚できなくなってきているし、打ち出せなくなっている気がすごくしています。当初は比較的新しく、ほかがまだやっていないことをいろいろとやっていたと思うんですけど、周りが同じことをやるようになると我々の特色ではなくなってくるわけですよね。そういうなかでじゃあ自分たちはここだけはちょっと違うんだよね、みたいな特色があるのかないのかも含めて、

そこを意識することをそろそろちゃんとやらないといけない。世の中では規制緩和がどんどん進んでいて、60単位以上オンライン授業ができるような認定がおりる大学も出てくるわけです。他大学との連携もできちゃうわけだし、教員だってほかと兼任してもいいという「基幹教員」に変わるわけですよね。高野さんが言うように他との連携も必要だと思うけれど、だからこそ余計、核がないままに連携を広げては、ただのぼんやりしたところになっちゃう気もするんですね。どういうコアを作るかが大きな課題なのではないか。そこがあれば安心してほかと連携できるし、どんどん広げられるし。そんなことがあるかなと思っています。

平山　先程の高野先生の話みたいな形で、今、大学間では総合大学のリソースを活用したような、大括り化と言ったり学部間連携と言ったりしていますが、そうした連携もやっています。ぜひ、そういうことにキャリアデザイン学部は積極的に関わっていただきたい。今はどちらかというとそういうことをやらない学部という印象です。キャリアデザイン学部は新しいこと先端的なところをやって尖ってやれる学部として、そこを特色として打ち出しきたので、何もやらないと非常にぼやけちゃうかなと思います。あとは、理事の立場からは、偏差値と受験生を維持するようにお願いいたします（笑）。

金山　ありがとうございました。本日はお忙しいところ貴重なお話を聞かせていただきありがとうございました。